

妄膜剥離

川津羊太郎

闇。

溶明。

舞台上に、男と女が並んで立っている。

男は若い。女も若い。

ふたりとも、動力の失われた機械人形のように、ぴくりとも動かない。

ふいに男に、生気が宿る。

男「あの、今日は、どうも、お足元の悪いなか、わざわざお越しいただいて、本当に、どうも、——とか言つて、こういう感謝のことば？ の、こういう定型文つて、あると思うんですけど、けっこういろんな場面で、結婚式とかいろんな式典とか、こういう舞台挨拶とかで、使われたりすると思うんですけど、遠路はるばるお越し下さいますて誠に、とか、本日はお日柄もよく、とか。でもぼくちよつと思つんですけど、感謝の気持ちを伝えるのに、その気持ちを定型文に嵌めこむのつてどうなんだ、つて、ぼくとか、時々考えるんですけど。そういう、うがった見方、俺してるぜ、つて感じ、ぼくけっこう好きだったりするんですけど。どうですかね？ あ、あと、うがった見方で言うと、さつきスタッフの人から放送とかあつたと思つんですけど、携帯電話の電源お切り下さい、とかつて、放送あつたと思つんですけど、こういう放送つて、されても、けっこう、別にマナーモードでいいんじゃない？ とかつて、ぼくとか、思ったりするんですけど、別にバレねえし、マナーモードにしときゃよくね？ とか、ぼく思ったりするんですけど。どうですかね？ でもその一方で、そういうときに、きちんと電源から切る、みたいなことを、きちんと実行する、つていうのも、人として大事なことになるかな、つていうのもあつて。(となりの女に向かって) ねえ、人として大事だよね」

女に、生気が宿る。

女「まあ、でも、どっちにしても、もう幕は上がっちゃったわけだし。客席側の照明？ も落ちてる、この現状で、今さらバックとかから携帯出して、電源切ろうとしたら、それはそれで液晶の光が洩れたりしてむしろ周りに迷惑、みたいな。なにより、今この

タイミングで携帯出したりしたら、『あ、あの人、言われてあわてて携帯切ろうとしてるな』とかって、周りの人ぜったい思うし、そういうふうに使われたら、それ、精神的にけっこうアウトだと、わたし思うんで、結論としては、もう、こうなったら、電源切った人は切ったまま、マナーモードにした人はマナーモードのまま、観てくれたらいい、っていうか、観るしかないんじゃないか、と思うんだけど、わたし的には「男」でもたぶん、中にはマナーモードにすらなっていない人とか、いたりするよね、きっと。ひとりくらい。絶対いるよね、ひとりは。賭けてもいいよね。そういう人はもう、けっこうどきどきだよ、終わるまで」

女「今から、『妄膜剥離』という話を始めます」

舞台上に、眩しいくらいに光が満ちあふれる。

男と女、生気を奪われ、ふたたび立ったまま動かなくなる。

やがて、光がもとの状態に戻る。

男と女、ゆっくりと、立ち位置を入れ替える。

男「えーと、これから話を始めようと思うんですけど、まず何の話から始めるかと言うと、まあ、ふつうに——ふつうに、っていうか、直球で？ 『眼』の話から始めたいと思うんですけど。タイトルが『妄膜剥離』なんで。あ、もちろん、いわゆる『網膜剥離』とは字が違うんですけど。網膜のモウが妄想のモウっていう。ま、ここにいる人たちは、ポスターとか看板とか？ 見てるはずなんで、当然知ってるとは思いますが。それはともかくですね、俺、けっこう昔から、子どもの頃から、じぶんの眼にはかなり自信を持ってまして、」

女「……」

男「あ、っていつても、もちろんそれは、眼の見た目、ルックス的なこと？ を言ってるわけではもちろんなくて。視力？ っていうか、目の力？ のことなんでしょう。視力で言うと、俺、小学校のときから、視力検査で2.0以外とったことない、っていう」

女「へえ」

男「そう。あの、自然体験学習とかって、あるじゃないですか。子どものころに。子どものころってというか、小学生とかの時に。っていうか、あったんですけど、俺のとき。

小5のときなんですけど、山の中で、青少年自然の家とか言って、みんなでテント張って、グループごとに。グループっていうか、班ごとに。カレー作ったり、キャンプファイヤーしたりして、で、夜、懐中電灯の明かり点けて、こう、光、天井のほうに向けてテントの真ん中に立てたりして、雑談とかするじゃないですか、やっぱ。恒例っていうか。っていうかしてて、寝袋とか入ったまま。そしたら、テントのなかに、やっぱ、蚊取り線香とか吊るしてたりするんですけど、蚊とかふつうに入ってくるんですよ。2匹とかいって。3匹とかいって」

女「へえ」

男「で、友達とかと雑談してただけど、そのときの班って、班分けとかいって、仲いいヤツらで班組めたりしたんで、余計に雑談とかしてたんですけど、そんなときは、たしかおんなじクラスにトベっていう女子がいて、その子の話をしたと思うんですけど、『トベ、マジヤバくねー』とかいう話をして。あ、この『ヤバい』っていうのは、悪いほうの『ヤバい』じゃなくて、良いほう、いや良いほうっていうか、まあ男子的には良いほうの『ヤバい』なんですけど、つまり、小5とかって、だんだん発育とかよくなってくるじゃないですか。

男「いや、発育とかって、なんかそういう言い方すると、微妙にエロい感じとかになっちゃうんですけど、っていうか、まあそれで合ってるんですけど、ニュアンス的には。そのトベさん、って、クラスでたぶん一番とか可愛いんですけど、可愛いうえに、なんか発育とかもよくて。そういうのって、ふつう、いや、ふつうとかってそれもよく分かんないけど、でもまあふつう？ クラスで一番可愛い女子と、発育のいい女子って、たいてい別じゃないですか。マンガとかアニメとかのキャラ設定でも、たいていそうだし。でもそのトベさんって、その両方を兼ね備えてる、っていうか。才色兼備？ いや違うか、まあとにかく、マジ、トベやばくね？ っていう話になってて、男子、盛り上がってて、そしたら、そんなときに、懐中電灯の明かりの中で、蚊が2匹とかいって、3匹とかいって、ブンブン飛び回るので、マジうぜえとか思って、でもなんか、他の連中それ無視して、トベの話とかに夢中で、なんだよ、蚊がうぜえと思ってるの俺だけかよ、とか思って、なんかお腹が立ったんですけど、でもマジうざかったんで、腹立ったけどしょうがないんで、他に誰も処理しようとしなくて、俺、しょうがなく寝袋から右腕だけこうやって出して、」

そのとき、女が、(寝袋から右腕を出すような仕草で) 右腕を空中に上げ、

男「その蚊を、こう、ちゃつ、ちゃつ、ちゃつて捕まえたんですね」

女。右手で宙を飛ぶ蚊をキャッチする。

男「そしたら、それまで夢中で話してたヤツらが、急に黙っちゃって、で、なんかオーツとか言ってる」

女「へえ」

男「で、逆にそれで俺のほうがビックリして。夏場とか、ウチのなかとかでしょっちゅうそういうのやってるけど、ウチの家族とかべつにそれでリアクションとかしないんで。それ、べつにふつうのことだと思ってる。っていうか、考えてみれば、家族でも素手で蚊を取るのって、俺だけだったんですけど、他の家族、みんな殺虫剤とかで殺してたんですけど、それ、俺的には、なんか素手じゃ汚れるし嫌なんだろうな、くらいにしか思ってた。だけど、なんかみんな、オーツとか言ってる盛り上がってる」

女「へえ」

男「それで、『どうやってんの、それ』とか言って、みんな俺の右手見て——あ、これちょっとコツがあるんですけど、右手で蚊をキャッチするじゃないですか、そのとき、こう、人差し指から小指までの4本の指のさきで、」

女(旅客機離陸前のキャビン・アテンダントの模範演技のように) 観客に対し、  
右手の人差し指から小指までを示す。

男「蚊をキャッチして、その瞬間、そのまま手のひらの腹の部分に、指先で蚊を突き刺すっていうか、突き潰すっていうか、そうやってキャッチするんですね」

女、観客にむけて拳を何度か握ってみせ、蚊を「突き潰す」運動。

男「それでまた、オーツとかなって。で、そのとき初めて、これ誰にでもできるわけじゃないんだ、って気づいて。それで、俺、なんかもしかして眼が——眼がっていうか、

動体視力？　がいいんじゃないか、って発見して、で、それ、ひそかに俺の自慢なんだよね」

女「へえ」

男と女、ゆっくりと、立ち位置を入れ替える。

女「——っていう話を、みなさんは今、初めて聞かれたと思うんですけど、もしかしたら中には、いや2度目だ、3度目だ、って人もいるかもしれないですけど、私は、けっこう彼から何回もこれ聞かされてるんですね。彼、そういう自分が一度した話、すぐ忘れちゃう人なんです。最初に聞いたときは私も、ふつうに、へえ、って思ったりしたんですけど、でもこういう自慢話系？　って、何回も繰り返しかえし聞かされても、何それ、ってなるじゃないですか。何またその話？　みたいな。彼、私がそういうリアクションして初めて、『あ、この話前にもしたっけ』って気づいて、まあ気づくだけマシなんですけど、そしたらなんか、気づいたら気づいたで、キョドった感じになって、ですぐべつの話に話を変える、っていう。そういう人なんですけど、」

男、はっとした顔をして（キョドった）感じになって、

男「あ、ええと、それじゃあ、眼に自信があった、っていう話は、まあこれくらいにして、話、びよんと飛んで、ええと、どこまで飛ぶかと言うと、俺が大人になったとこまで飛びます。大人になって、俺、何をしてる人かと言うと、じつは、こうみえてプロボクシングをやっていたりします。——つつつても、世界戦とか、そういうのとは縁がないっていうか、まあ俺のボクサー人生全体で見れば、まったく、これっぽっちも縁がない、なかった、わけでもなかったんだけど、でも、まあ結果論的には？　世界戦とかしたことはないんだけど、でも戦績で言えば、これまで22戦13勝7敗2分け4KO、なんで、そんな悪くないっていうか。一応今も日本ランカーだし、けっこういいほう、どっちかはつきりしろって言われたら、勝ち組のほうじゃないか、って思ったりするんですけど。（女の顔をちらりと見て、また（キョドった）感じになって）

その、ボクシングやってる、って話から、さらにびよんと話は飛びます。どこに飛ぶかと言うと、それは、俺が、初めて人を殴った話、ってところまで飛びます」

女「ええと、これからする話は、時期でいうと、彼が中学生のときの話で、詳しく言うとも中学1年のときなんですけど。あ、でもだからといって、じゃあ小学生までは彼、誰ひとり人を殴ったことがなかったのか、っていうと、そういう意味ではなくて、ケンカとか、ふつうに時々したりはしてたんで、たぶん殴った殴られたみたいなことも、まったくなかった、わけじゃなかったと思うんですけど、ただ、これからの話は、彼が、生涯初めて、よしこれから人を殴るぞ、って意識して、よしいま俺、人を殴りつつあるぞ、って意識して、殴ったあとで、よし俺いまこいつを殴ったぞ、って意識した、っていう意味で、彼が生涯初めて人を殴った、って言ってもいいと思う、っていう話なんですけど」

男「正直、そのときなんでそいつ殴ったのか、殴るようなとこまでいったのか、まったく覚えてないんですけど。なんかそいつ、小学校が違って、あ、うちの中学、校区的にふたつの小学校から生徒が合流してくる感じになって、それで中学校に入って、初めて知り合ったヤツだったんですけど、そいつ。おんなじクラスだったんですけど、でも、入学したところから、なんかそいつにイラツとしたのは、覚えてたりするんですけど、なんであんなにイラついてたのか、それ、よく分かんなくて、」

女「つていうのが、それから時が経って中2中3になると、けっこう、これから彼が殴ることになるっていうその子と、友達の一ひとりとしてるんでた、っていうのがあって。だから中学3年間をトータルで見ると、けっこうその子と仲良くやってた、っていう事実があつて。でも彼、これからその子を殴るんですけど。そのときはまだ友達じゃなかったんで」

男「けっこう険悪なムードだった、っていうのははっきり覚えてるんですよ。場所は、——うちの中学校って、校庭とはべつに、けっこうな広さの中庭があつて、その中庭の端に倉庫があつて、その倉庫の前って、校舎から見えづらい、死角になって。だから場所はそこなんですけど。」

男「普段そういうとこ、よく行く場所とかじゃないんで、そのとき、たぶんわざわざ呼び出したりしたんだと思うんですけど、俺がそいつ呼び出したのか、そいつが俺を呼び出したのか、ちよつと覚えてないんですけど。でももし俺が呼び出したとしたら、そのときは、もうそいつ殴る気マンマンだったと思うんですけど、その倉庫の前って、」

校舎から完全に死角になるところだったんで。

男「あ、わかった。——あ、ごめんなさい、今、ちょっと思い出したんですけど、たぶん、なんでそいつ殴ることになった、っていうか殴ることにしたか、っていうと、これたぶんなんですけど、たしか、そいつが、俺の側の小学校から来たヤツの、消しゴムとかシャーペンとかを借りたっていう出来事がまずあって。それでそれを借りパチッて、その貸した本人っていうのが気が弱くて返せって言えなかったんで、他のヤツが『おいお前返せよ』みたいに言ったら、『はあ？』とか言ってる。『なにそれ。なんで返さなきゃいけないの？』みたいなこと言ってる。『もう時効だろ』とか、なんかそんなノリで、たしか一時期、それが原因で、俺の側の小学校出身の連中と、向こうの連中が険悪になった、っていう事件があつて。そういう事件の一環として、たしか、その倉庫前の呼び出し、になった、と思うんですけど」

女「でも、それにしても、もしそれならそれで、倉庫の前に、彼の小学校側の仲間とか、向こうの仲間とか、ふつう何人かでもいたりすると思うんですけど、そういうことはなくて、その、これからやる、彼が生涯初めて人を殴ったそのときって、倉庫の前には彼とその子のふたりきりだったんで、たぶん、彼の記憶はどっかが飛んでるか、それか、その消しゴム事件？ シャーペン事件？ とは、今回のことは直接関係なかったか、どっちかだと思うんですけど、」

男「で、俺、すげーむかついてて。でもそのイライラを解消するために殴った、っていうか、これから殴ることになる、っていうのは、ちょっと違うと思うんですけど。だってこの場合、大義はこっち側にあるわけじゃないですか。向こうは、消しゴムとかシャーペンとか、何か分かんないけど、借りパチッて開き直ってるだけなんで。だから義憤、っていうか、すげーむかついてて」

女「たぶんシャーペンとか消しゴムとかは、関係ないと思うんですけど」

男「それで、俺、倉庫前にそいつ呼び出して、たぶん何か文句言ったと思うんですけど、それはあんまり覚えてなくて、なんか向こうが最初に飛びかかってきた、っていうのは覚えてて、飛びかかって、っていうか、ふつうにタックルみたいにしてきたんですけど、俺、ほら眼いいじゃないですか、それで、とっさなんだけど、そいつの顔がなんかスキだらけだな、っていうのが分かって。分かってっていうか、もっと本能的に察知して、それと連動して、右手がスツて、ふつうに前に出て、今思うとけっこうあれ、邪念なく出したパンチだったんで、すげー素直な右フックになって、ストレートじゃない



くてフックだったんだけど、でモロにそいつの頬を捉えて、——あ、でもこれ、今だったら絶対アゴに入る、っていうか入れると思うんだけど、そんなときはボクシングのことも全然知らなかったし、パンチの仕方とかも本格的には知らなかったし、映画とかマンガとか見せて、パンチは頬に入れるものだと思ってたんで、頬に入れて、でそれモロに入って、そんなとき、俺、ガキッという骨と骨がぶつかる音？ 聞いて、それ、たぶん俺の耳からも聞こえたんだけど、それより、なんか拳のじぶんの骨から？ 直接伝わってくる、みたいな、そのガキッという音が、拳から体のなかに入ってきて、背骨にぐわって響いていく、みたいな感覚があって、それ、すげーな、って思ってた。そのときはまだボクシングやってなかったし、それから、高校入るまではボクシングとかやらないんだけど、でも今考えると、俺のボクシングの原点って、あれだったんじゃないかな、って、思う、っつー話でした」

男と女、ゆっくりと、立ち位置を入れ替える。

女「あの、みなさん、今日は、なんかそろそろ、今日のこれって、どういうあれなんだろう——って、戸惑ってる方もいらっしやると思うんですね。なんか、ふつうのお芝居の感覚で来られた方とかは、『あれ、何？ 何が始まんの？ っていうか、何が始まってるの？』って、思ってる人は思ってるのかな？ 　って、思ってるんですね、私は。で、どんなことが始まるのかというと、というか、始まっているのかというと、というか、これから続いていくのかというと、それは、さっきみたいな、彼のくだらないおしゃべりが、これからも延々続くとか、そういうことでは実はなくて、つまり——〈お祈り〉なんですね」

男、女のほうをちらりと見る。

女「あ、〈お祈り〉っていうと、なんか、なんていうのか、まあ、宗教？ みたいに聞こえちゃうけど、これは、そういう話では全然なくて。そういう宗教チックな話なのではなくて、強いて言うならスピリチュアル？ 　な話なんですけど、私、実は、さっきか

らみなさんのために〈お祈り〉してたんですね。気づいた人いないと思うんですけど。何を〈お祈り〉してたかというと、みなさんの幸せ、を、〈お祈り〉してました」

男「あ、あの。なんかこういうふうに言うと、あ、やっぱ宗教じゃん、って思う人、いると思うんですよ。でも、それは違うっていうか。そういう宗教チックな話なのではなくて、強いて言うならスピリチュアル？ な話なんですけど。私、実は、さっきからみなさんのために〈お祈り〉してたんですね。気づいた人いないと思うんですけど。何を〈お祈り〉してたかと言うと、みなさんの幸せ、を〈お祈り〉してました」

女「あ、でもやっぱこういうふうに言うと、あ、やっぱ宗教じゃん、って思う人いると思う——っていうか、なっちゃいますよね、やっぱ。でも、それは違くて、そういう宗教チックな話なのではなくて、強いて言うなら、」

男「スピリチュアル、って、なんか、便利な言葉ですよ。なんか宗教チックなことを言っても、あ、違う違うこれスピリチュアルだよ、って言ったときや、毒が中和されるっていうか。まあなんとなくですけど。でもだからっていうのもあって、彼女が以前所属してたっていう団体があるんですけど、いまはもうその団体とは全然関係ないんですけど、彼女、でもまだそこに所属してたとき、その団体では宗教っていう言葉はどっちかっていうとタブーで、一般の人に活動の説明をするときは、スピリチュアルっていう言葉を使うように、って、指導されたりしてたんですね」

女「あ、宗教かと思った？ 違う違う、スピリチュアル。うん、そう。ほら、一時期テレビとかでもバンバンやってたじゃん。エハラさんとか言ってる。今はもうあんま見なくなっただけ。まあ、あれは見世物なんだけど、たとえるなら、ああいうのイメージしてもらえば分かりやすいと思うのね。ほら、この世って、やっぱ科学じゃ割り切れないことって、いっぱいあるわけじゃん。運勢とか、バイオリズムとか。ちよつとアヤシゲだからって、そういうのを排除した人生って、どうかな、って思わない？ なんかそれ、すぐつまらない、とか思わない？ でも、そういうことをちよつと突き詰めていくと、すぐ『あ、それ宗教？』とかって間違われちゃうっていう。でも、ウチの団体って、何かを崇拜するとかまったくないし、それに、あ、たとえば、私んちって浄土宗なのね、宗派。ちなみにミキちゃんちって何宗？」

男「や、分かんないけど。なんだろ——たぶん、仏教？」

女「ああ、そうなんだ。……まあ要は、それがキリスト教でも、イスラム教でも、ぜんぜん問題ないわけ。ウチの活動は宗教とは無関係——っていうか、別次元のことをやって

てるから」

男「あの、ちよつと、いいですか？」

女「あ、うん。何？」

男「あの、私、ちよつと思っただんですけど、そういうのって、やってて楽しいですか？」

女「え？ あ、え？ 何が？」

男「そういう、宗教？ みたいなことが」

女「いや、これ宗教じゃないし。だから全然次元が違ってくる」

男「でも、これって、カンユウですよ？」

女「カンユウ？ あ、そんなふうにとつてた？ ううん、全然カンユウとかじゃないよ」

男「や、べつにそれならそれで、いいんですけど。でも、なんかそういうのって、楽しい

のかな、って。やってる人は、っていう、ソボクな疑問です」

女「え、もちろん楽しいよ。もちろん」

男「楽しいんだ」

女「え？ ちよつと待って。え、何でそんなこと聞くか、聞いていい？」

男「あ、ごめんなさい。怒っちゃいました？」

女「いや、怒ったりしないけど。ただ、なんていうか、何で『楽しいのか』みたいな質問

が出るのか、それが理解できないっていうか。むしろ私からしたら、ミキちゃんのほ

うが、そういう質問を思いついてしまう、っていう時点で、人生で楽しいことがない

のかな？ って、思っちゃうけど」

男「そうですか？」

女「うん」

男「わたし、やったほうがいいですかね、宗教？」

女「いや、ウチ宗教じゃないし」

男「(正面を向いて)——みたいなやりとりを、彼女、一時期、毎週みたいにやって、い

ろんな人と。それ、何のためにやってたか、っていうと、まあカンユウのためにやっ

てたんですけど、彼女の所属してた団体では、カンユウではなくて、入会促進活動、

略してニューソクって呼んでたんですけど。ニューソクうまい人はやっぱ幹部の人た

ちの覚えもよくて、昇進？ ランクアップ？ も早い、みたいなことかもあったみ

たいんですけど、まあそれはべつにどうでもよくて。あの、さっきまでボクサーの

男の話とかしてたじゃないですか、で、なんで急に宗教——っていうかスピリチュア

ル？ な女の話になったか、っていうと、この彼女っていうのが、さっきのボクサーの彼の、今カノ、っていうか、今カノになりかけ、っていうか、今カノになりかけつつある、っていう状況があつて、それで（女を指し示して）彼女が出てきたわけなんですけど、」

女「あの、今、彼、私のこと、今カノとか、今カノになりかけ、とか、今カノになりかけつつある、とか言ってたんですけど、それ、じつは大きな勘違いで、彼の。私のほうはそういうつもり、全然なくて、じゃあ彼のことを何と思ってるかという、ライフレスの一人だと思ってるんですね。あ、ライフレスっていうのは、私が前行ってた団体の造語で、ほら、家がない人のことホームレスとか言うじゃないですか。で、現代って、自分の人生見失ってるような人たちって、いっぱいいるじゃないですか。私、そういう人を救うのが趣味なんです。人生を見失ってるから、ライフレス」

男「なんか、死人みたいで、嫌なんですけど、その呼ばれ方」

女「ライフレスの人の特徴として、一番あるのが、自分がライフレスだつてことに気づいてない、っていうのがあつて。だから、私、気づかせてあげたいんですね。気づいてないライフレスの人たちに。たとえば（男を指し示して）彼の場合、もう30過ぎてるんですね。で、さっき彼、じぶんはボクサーだとか言ってたんですけど、30って、ボクサーとしてはもう峠を越えたという、もう、ほとんど終わり、みたいなところがあると思うんです、私。なんかボクサーの定年って、37歳とかって、協会とかから決められてるみたいで。だから彼がこれからどんなに頑張っても、もうあと7年、みたいな。もう先見えてる、みたいな。」

女「でも彼、そういうところ、直視しようとはしないんですね。あ、これもライフレスの人たちの大きな特徴のひとつなんですけど。で、ボクシングとかやってるんで、彼、定職には就いてないじゃないですか。何をして生計を立ててるかという、ボクシングの収入だけでは当然食べてけないんで、毎日バイトとかしながら、生活してるんですね。30で。バイト、ボクシング、バイト、ボクシング……っていう、バ行の繰り返しなんです、彼の人生」

男、ゆつくりと、身体を動かさしはじめる。

女、正面を向いたまま、しばしの沈黙のあと、

女「あ、これ、急に何を始めたかというと、朝練で、ロードワークに励んでるところなんですね。彼の毎日の日課というか。一応プロボクサーなんで、この十年くらい、ほとんど休みなく、毎朝ロードワークやってるんですね。だいたい今くらいの時期だと、朝四時半ごろに起きて、特製の野菜ジュースを一杯ぐいっと飲んだあと、ロードワークに出る、っていうのを日課にしてて。ボクサーのロードワークって、ふつうのジョギングとはちよつと違って、というのも、3分1ラウンドの試合形式に特化した身体をつくる、っていう、目的がはっきりしてるからなんですけど。だから50メートルダッシュとジョグを組み合わせたか、坂道とか階段をつかって身体に負荷をかけたか、っていうメニューを、けっこう細かく設定して、ルーティンするわけなんですけど、あの、ちよつとそれより、さつき言った、彼が毎朝飲むっていう特製野菜ジュースの話をしていいですか？これ、もともとは彼の田舎で、彼のおばあちゃん——っていう、これは彼の母方のおばあちゃんなんですけど、が、畑でつくっている野菜を組み合わせて——組み合わせてっていうか、もう手当たり次第に突っこんで、って言ったほうがいいと思うんですけど、っていうのが基になって。すごい、もうこれ液体じゃないだろ、ってくらいドロドロで、色とかももう、小学生が写生大会終えたあとの筆洗いの水か、みたいな色で——」

男、いつのまにか、別の動きに変わっている。

女「あ、話の途中なんですけど、彼、いま職場で、2段に積んだダンボールを運んでるところです。運送系のバイトなんですけど、オフィスの引越し専門みたいな仕事をして、っていうのが、拘束時間の割りに実入りがいい、っていうのが一番この仕事を選んだ理由なんですけど。彼、仕事上のことで言うと、ひとつすごく不思議に思ってることが今あって、それは何かっていうと、これはある会社の話なんですけど、それも何をやってる会社かよく分からないんですけど、ほとんど季節ごとみたいに、事務所を引っ越しする会社があるんですね。本社はずつと一つのところにあるみたいなんですけど、その支店を、出してはすぐ畳んだり、かと思えば一駅しか離れてないところに移転したり、っていうことをほとんど季節ごとにする会社があつて、それは、すごい彼のバイト先の運送会社からしたら、お得意様みたいな感じなんですけど、でもなんかすごい怪しいですよ、そんな、支店っていうか事務所がコロコロ変わるような

会社。でも事務所の中を見ると、別にふつうのデスクとか、事務用のラックとか？ あとコピー機とか、そういうふうの会社とおなじものしかないんだけど、社員とかも、5人くらいしかないんだけど、べつに普通っぽい人たちだし。でも、ほとんど季節ごとに、支店を閉めたり移転したりを繰り返してるんですよ——」

男、またいつのまにか、別の動きに変わっている。

女「あの、突然ですけど、このあと彼からも、最近なんか目がおかしくて、っていう話が出てくると思うんですけど、なのであんまり先走って私から言うべきじゃないかもしれないけど、まあ先走って言っちゃうんですけど、彼、最近目の調子がおかしいんですね。それで、いま、彼が何をしてるかと言うと、これは、ネクタイを締めているところなんです。なぜネクタイを締めているかと言うと、それは、これから病院に行くからなんです。で、なんで病院に行くのにネクタイを締める必要があるのかというと、これは、ちよつと説明が必要だと思っんですけど——簡単に言うと、彼にとつてはそれはむしろ自然なこと、っていうか、『病院に行くんでしょ、ならスーツじゃね？』みたいにスムーズな思考の流れ、っていうのがあって、じゃあそういう彼の中の常識、みたいなものがどういふふう形成されたのか、という話をする、これは、じつはけっこう単純なことで、」

男、なかなかネクタイをうまく結べず、イライラしながら、なんどもやり直す。

女「——これ、じつは彼もあんまり記憶にないことなんですけど、彼、子どものときに突発性の難聴になったことがあって、それは小学校2年生のときだったんですけど。ある日、目が覚めたら、なんか人の声とかが聞こえなくなってる、もちろん前日にもその前兆は、あったんですけど、彼はそういうのよく分からなくて、っていうのがあって、で、その日の朝、母親が最初にそれに気づくじゃないですか、『あれ、この子なんかおかしいぞ』って。それで病院に連れていったんですけど、当然ですけど。で、これ、じつは彼はあんまり覚えてないことなんですけど、そのとき、近所の総合病院に行っただんですけど、けっこう待合室で待たされて、そのとき、彼のちょうど目の前の、席というか、ベンチというか、に座ってたのが、30代後半くらいのスーツの男の人で、」

たぶん風邪とかで来てた人なんですけど、診察を終えたらすぐその足で会社に行く、とかでスーツ姿だったと思うんですけど、小2の彼は、耳が、そのとき聞こえないじゃないですか、でもなんか、病院の待合室の、どことなく慌ただしい感じ、って、なんとなく分かって、その、なにも聞こえない無音の世界で、なんか急ぎ立てられるみたいな感じ、だけが分かる無音の世界で、彼、その目の前に座ったサラリーマンの男の人を、なんとなくじっと観察してて、そのスーツの人は、女性自身とか、女性セブンとかをなんかずつと読んでたんですけど、それを彼、ずつと見てて。っていうことがあって、それで、それが刷り込み？ みたいになって、あでも刷り込みって言うっても、それ1回だけなんですけど、そういう体験をしたのは。でもそれで、彼、大人になってから、『病院に行くんだろ？ ならスーツじゃね？』っていう感じになったっていう。でもこれ、彼はまったく覚えてないんですけど——」

男、ようやく鏡のまえでネクタイを結ぶのに成功し、にんまり微笑む。その微笑んだ鏡のなかの自分を見て、さつとファイティングポーズをとり、すばやくワン、ツーのパンチを繰り返す。

女「あ、これは、ボクサーの性ですね。やってしまいますね、やっぱり」

男、また別の動き。空中の見えない吊革につかまる。

女「じぶんの家から、いちばん最寄りの眼科って、知ってる人少ないと思うんですけど、彼も、それよく知らないんですね。っていうのと、あと田舎の病院より、ある程度都会の病院のほうがいいだろう、っていうのもあって、で、彼、いま電車で最寄りの街に向かっていると。あの、ちょっと見てほしいんですけど、彼、電車に乗ったとき必ずやる癖っていうのがあって、それは、本人は動体視力の訓練、とか内心で思っただけっていうのもあるんですけど、電車の窓の向こうを流れていく景色とかって、あるじゃないですか。その、流れていく看板を、それも電車がけっこうMAXのスピードのとき、窓の外に流れていく看板とかを、見る、というか読む、っていうのが、彼、毎回やるんですね。動体視力の訓練とか思っただけ」

男、タイミングを計り、すばやく目と首を動かして流れ去る看板の文字を読み取る。

女「はい、これですね。ちゃんと見れました？ ……またやりますよ」

男、みごとな動体視力で、看板の文字を正確に読みとる。

女「はい、おみごと！ またこの、『俺、看板を読んだ』みたいな勝ち誇った顔が憎らしいですね」

男、タイミングを見ながら、何度も看板を読む。

女「——もちろん、彼、年齢的にはボクサーとしての峠を越えてても、プロはプロのボクサーですからね。いちおう、A級のライセンスを持つてるボクサーなんで。まあ、さぞかし読めるんでしょうね、看板の文字」

男、ふと窓に映るじぶんの姿に気づいて、さっとファイトポーズをとる。

女「はい、出ました」

男と女、立ち位置を入れ替える。

女「あの、話は変わるんですけど。これからちよつとだけ、彼の母親の話をしたと思うて。彼の母親って、いうのは、南紀地方の小さなお寺の三女として生まれた女の人で、だから下の名前もちよつと一般的な女性名とは違ってて、蓮芳、みたいな、たしかそういう感じの——まあ、それは今からする話とはまったく関係ないんですけど、そういう名前で、あ、ただ、彼の母親の旧姓って、たしか苗字が宋とかいう苗字だったんですね。それ、たぶんもともと大昔に大陸から渡ってきた系の苗字なんだと思う



んですけど、もし、仮に彼の母親の名前が本当に蓮芳で、苗字が宋だったら、ソウレンホウ、って、なんか野菜みたいな名前になるな、って。これ、単に今思いついたから言ってみたけなんですけど、で、まあ、案の定ダダズベリ、みたいな。まあ、言わなければよかった、って感じなんですけど——そんなことはどうでも良くてですね」

男「そう。で、彼女が今してた、っていうかしようとしてた、ボクサーやってる彼の母親の話、つてのの続きなんですけど。右手が、生まれつき不自由だったらいいんですね。筋肉の先天的な異常か、詳しいことはあんまりよく分からないんですけど。でも生まれつき、つていうのは分かかって、なんで分かかってるかという、彼の母親自身が、ことあること」

女「(不器用に右肩を上げてみせて) ほら、見てみい、これ。たとえ体がこんなんでも、人間なんとか生きていけるもんなんや。これはもう生まれついでのものやけど、あんた、右手を見せてみい。不自由なんか？ 左手を見せてみい。不自由なんか？ 違うやろ。じゃあなんでそんなに自分の体、粗末にするんや。ええ加減にしい」

男「つて感じで、そういう説教をことあることにされたつて、これは彼からぼく、よく聞かされた話なんですけど。なんか、その説教そのものは、あれなんですけど、その(生まれつき) つてことばを、ことさら強調するつてわけじゃないんですけど、でも、子どもながらに、彼、今この状況での説教に、その(生まれつき) つていうワードいらないんじゃないかって、何度も何度も、ケンカしたり不注意から怪我するたびに、母親からされる説教のたびに——たびにっていうか、正確には、その説教の何十回目かのときから、ずっと思つてて、でもなぜか、そういう説教のとき、彼の母親つていうのは、必ず(生まれつき) つてワードをセットにして言つて、それで、彼は(なんでなんだろう) つて、子どもながらにずっと不思議に思つてたつていう」

女「べつに、それは単にそういう表現が口癖になっただけで、意味なんてないのかもしれないけど、でも逆に、意味もなくそれが口癖になつてるつていう段階で、それは意味があるんじゃないか、つて」

男「むしろ、もしかしたら、母親の右手が不自由なのは、生まれつきじゃなくて、もつと後天的に、もしかしたら彼女自身の不注意かなにかで、不自由になつたんじゃないか、つて、思つてた時期も、正直あつて」

女「だからつて、母親に、直接聞けないじゃないですか、『その右手、本当は生まれつきじゃないんだろ』とかつて。なんか、ホントに地雷とか埋まつてそうで」

男「だから、いまだにその真相は謎なんですけど。でも、母親の右手が不自由だったというのは、事実で、だから、赤ん坊のころはそれでも抱っこが普通にされてたらしいんですけど、1歳とか2歳とかになって、体重がある程度増えてからは、抱っこが無理で、だから母親に抱っこされてた記憶っていうのは、なくて、でもそれは右手が不自由、っていうのはっきりした事実があるから、まあ——別に、いいんですけど」

女「いいんですけど、とか言って、こういうとき『別にいいんですけど』っていう言い方をするので、たいていどうでもよくないときが多いので、私、そういうのは、彼に指摘するんですね。だって、やっぱり、ほら私って、人を救うのを趣味にしてるじゃないですか。で、人を救うのって、究極、そういう傷、みたいところに、突っ込んでいくっていうか、えぐり出す、みたいなことが、必要じゃないですか。だから私は、そういうときって、容赦なく突っこんでいくことにしてるんですね」

男「いや、でもべつに、それ、本当にどうでもいいことだし」

女「って、彼は言うわけですけど、でも私は容赦しないんですよ、そういうとき。そこで矛先を収めてしまうって、やっぱりちよつと違うと思うし、違うというか甘いと思うし、それじゃ人なんか救えないっていう。これ私のモットーなんですけど」

男「っていうか、まじ、逆に、なんでそこにこだわるわけ？ まじで、抱っこされた記憶がない、とかっていうと、女って、なんか『可哀相』とかそういう反応になるじゃん。なるから、俺、『いやまあそれは別にいいんだけど』って、言うじゃん。それべつに本当にどうでもいいことだから。だからさ、そこは素直に『ああ、それは別にいいんだ』って、言葉どおりに受け取ってほしいとこなんだけど。受け取ってほしいというか、お前は、そういうこと、素直に受け取ることができる女だと思ったから、この話したんだけど」

女「って、彼、ちよつとキレたみたいになって。彼からすると、それって私をひるませようと思っただけのことなのかもしれないけど、でも私としては、それだけ彼がキレぎみになること自体、ああ、彼の問題、やっぱりそこにあるな、って、確信を深めるだけなんですわね」

男「だって、考えてみ？ 右手が不自由で、子どもの体重を支えられないって分かって、現実問題、どうやって抱っこしろっていうわけ？ それって、俺にたいして、っていうより、俺の母親にたいして、すっげー失礼だと思わねえ？」

女「って彼は言うんだけど、私、思わないんですね。失礼とか。全然、これっぽっちも。」

だって、彼女の事情はどうあれ、まだ母親とのスキンシップを求めている乳児とか幼児のときの彼にたいして、彼女がそれを満たしてあげられなかった、っていう事実は事実として厳然としてあるわけだし。そこに現在の彼の問題の根がある、ってことも、多分おそらく確かなことだし」

男「つていうか、お前さ、マジで、俺の問題、俺の問題って、しきりに言うけどさ、俺、そんなに問題抱えてるか？俺の性格って、そんなに問題あるか？だったら、聞くけどさあ、じゃあなんで俺と寝るわけ。なんで俺と一緒にいるわけ」

女「率直に言って、私が彼と寝ることと、彼が今なにかしらの問題を抱えていて、それが母親との関係性に起因してるってこととのあいだには、まったく何も関連性がないと、私は考えてる——考えてるといふより、明確にそう事態を把握しているんですけど、でも、彼にはそこが混乱というか、混線してて、——で、なぜそこで混乱というか、混線してしまうかと言うと、それは、彼がそこに問題を抱えているからなんですね」

男「じゃあさ、俺も、はつきり言っている？この際だからさ。お前、俺の問題、俺の問題っていうけど、結局のところ、それはお前の問題なんじゃないのか？そういうことを、お前、一度でも考えたことあんのか」

女「はい。これ、問題を抱えてる人が必ず返す反応なんですね。『ああ、またこの「反応？」って。私みたいに、人を救うこと趣味にする人間にとっては、もううんざりするくらい繰り返されてきた反応なんです。結局、問題を抱えた人って、自分に余裕がないから、その問題を自分のものだと自覚するのに耐えられなくて、その問題を、目の前の人間——この場合私なんですけど、私の問題だって、すり換えようとするんですね。ちよつと、もう一回、今の彼の発言をリプレイしてみますね」

男「じゃあさ、俺も、はつきり言っている？この際だからさ。お前、俺の問題、俺の問題っていうけど、結局のところ、それはお前の問題なんじゃないのか？そういうことを、お前、一度でも考えたことあんのか」

女、男の顔をじろじろ見て、また顔を正面にもどす。

女「あるかないか、つて訊かれたら、当然、あるに決まってるじゃないですか。ある上で、これ、私の問題じゃないんですよね。そういう結論なんですよね。だから、私、言うてあげるんです。」

女「(男の顔を見て) ねえ、そうやって自分の問題から目を逸らさないで。あなたがつらい  
思いをした——現にしている、っていうことには同情する。でも、これはあなたの問題  
だから」

男、いったん女から視線を外し、正面を見る。それからまた、女を見て、

男「じゃあ、言ってみろよ。お前のいう『俺の問題』って、何なんだよ」

女「それは、私に聞いちゃだめ。私がそれを答えるのは簡単なことだけど、それは、あな  
たが自分で答えを見つけないと、意味がないの。私の役目は、あなたの問題がどこに  
あるのか、あなたと一緒に混乱を正して、整理してあげることだけ」

男、女から視線を外し、正面を見る。

男「あの。正直、俺、この女のこういうところ、マジうざい、と思ってるんですね。でも  
じゃあ何でこの女と一緒にいるかというのと、これ、もうぶっちゃけて言ってしまうば、  
ヤれるから、以外にないですよ。こういう面倒くさいこと言うけど、でもこの女、  
なんかヤラせてくれるし、結構、顔とか好みだし、おっぱいわりと大きい。って、  
こういうことぶっちゃけてしまうと、もう、元も子もない、っていうやつなんですけ  
ど、だから、彼女にはそういうこと、ぜったい言わないし、っていうか、むしろ、ど  
うやってその部分隠して、隠してっていうか、そういう部分は部分として、それ以外  
にも理由があるから、俺はお前と一緒にいるんだぞ、感をどうやって出そうかと、そ  
ういうことばっか、俺はふだん考えてるんで、それで彼女のこういう面倒くさいこと  
ろにもそれなりに付き合ってるんですけど。それにしても、あまりに面倒くさ  
いこともあって、今、まさにそういう状況なんですけど」

女「ねえ、今は、そうやって目をそらすことで問題が解決するっていうか、問題のほう  
あなたから少しずつ離れていくって、そういうふうに考えてるのかもしれないけど、  
でもそれは実は幻想で、あなたはこの問題を、今、まさに直視すべきで、これは、直  
視することでは解決しえない問題なの。私は、そのためのお手伝いなら、喜んで、  
どんなことでもしてあげるから」

男「その、喜んでなんでもしてあげる、っていう項目のなかに、どうやらセックスも含ま

れてるぞ、ってことを、俺はなんとなく感じ取っていて、俺、そういう臭覚はちょっと他の男より優れてると思ってるんですね。だから、これは、もしかしたら、彼女の言う『俺の問題』？　つまりマザコンっぽさ？　そういう弱さ的なものをうまく演出してけば、なんか、すごいプレイとかも、他の女なら絶対引いてできないようなことも、この女、『問題の解決』とかいう名目のもとなら、やらせてくれるんじゃないか、って、俺は瞬時のうちに嗅ぎとって、女のほうに擦り寄っていくわけですよ。

男「(女を目をまっすぐに見て) 分かった。お前のいうこと、俺なりに、ちよつと考えてみるよ」

女「(正面を見て) —— っていう、」

男と女、立ち位置を入れ替える。

男「えっと、ちよつと話を戻します。さっき、俺の母親が、生まれつき——まあ生まれつきかどうかは分からないんだけど——右腕が不自由だった、っていう話をしたじゃないですか。で、今カノ——っていうか、今カノになりかけ、っていうか、なりかけつつある、っていう女に、いろいろカウンセリングみたいなことされて、でもそういうウザさを差し引いても、まあ、彼女との関係は一応キープしとこうかな、と思ってる、っていう話をしたじゃないですか。で、そういうことと関係あるか、分からないんだけど、最近よく見る夢があるんですね。最近、っていうか、その夢じたいは、子どものときとかから、けっこう頻繁に見たりしてた夢なんだけど、その夢を、ちよつと前まではあんまり見なくなってる、それを最近また、見るようになった、っていう話なんですけど」

女「子どものときからけっこう頻繁に見ていた、っていうっても、実際は、実際は、というか、厳密に言くと、まったく同じ夢を繰り返しかえし見していた、というわけではなくて、というの、子どものとき見たときには、当然自分は子どもとして夢に出てきてたわけで、じゃあ今、今というか最近見るようになった夢ではどうか、っていうと、それは子どものときの自分として夢を見ているわけじゃなくて、ふつうに、最近の自分として夢を見てるわけなんですけど」

男「夢を見てるって言っても、もちろん、それは夢から覚めたあとで、ああ夢を見てたな、とか思うわけで、ああ、またあの夢見たな、とか思うわけで、その夢のなかにいる自分は、当然そういう『これは夢の中だ』みたいな自覚ないっていうか、そもそも『これは夢か、現実か』みたいな発想自体がない状態で——っていうか、まあそれは今、この瞬間もおなじなんですけど。この目の前の世界が『夢か現実か』みたいな発想がなく、ここにいて、っていう意味では、今も夢のなかもおなじなんですけど」

女「ただ、厳密に言うと、今はもう、『夢か現実か』みたいな発想自体がない、っていう状態には、すでにもうなくて、っていうのは、今は、こういう話をしたことでもうすでに『ここは現実だぞ』っていう発想がすでにできてしまっているからなんですけど、『夢か現実か』的発想がない、っていうことを語った時点で、そういう発想を持つてしまった、しまうわけなんですけど」

男「そういうことは、置いておいてですね、ともかく、その夢のなかでは、そういう発想はないわけですよ。で、子どものころだったら、ふつうに下校している途中だったり、最近だったら、マックでコーヒー飲んだりするわけです。そうすると、なんか周りが、ガヤガヤ騒がしくなるんですね。下校とかしていると、なんかはつきり、こう人とかがわらわら出てくるわけじゃないんだけど、なんとなく、町自体が騒がしくなってくる感じがして、」

女「マックとかでお茶してても、マックとかって、たいてい周りは、周りはっていうか、店内はある程度騒がしいのが基準値、っていうか、マックとかで騒がしくないことの方が、逆にめずらしいことではあるんですけど、」

男「でもそういう感じ、つまり日常的な騒がしき、マックの基準値的な騒がしきとは、根本的に質の違う騒がしき、っていうのがあって、あってっていうか、そういうふうな騒がしきに、周りがなってるって」

女「なんか、そういうのって、分かるじゃないですか、直観的に、夢のなかって。客観的な観察の結果とかではないけど、もうそうなんだ、っていう。ああそういうことなんだ、っていうのが、確信的に分かってるっていう、」

男「で、そのときもそういう状態で、だんだん、周りが日常的・基準値的ではない騒がしさになっていくのが直観的に分かって、分かって、っていても、最初はそれ、俺、気づかないんですよ。そういうふうに、周りが変化していることに。でも、その基準値的じゃない騒がしさっていうのが、こう、ある一定の基準値を超えたときに、あ、

なんかヘンだぞ、っていう。なんかリミットをいつのまにか超えてるぞ、自分の知らないうちにリミット振り切ってるぞ、みたいに、気づくことがあって」

女「っていうか、そもそも物事って、そういうふうにしき気づくこと、できないじゃないですか」

男「そう。で、そのときもまさにそういう感じで、いつのまにか、自分の知らないところで、何か起きてるみたいだぞ、って、気づくんですね。周りが、なんかざわざわ騒がしくなるんで」

女、舞台上で観客に背を向ける。

男「で、なんだなんだ、って、周囲を見まわすわけですよ、自分が。で、そのときに、あ、こういう夢の前にも見たことがあるぞ、って気づくバージョンと、気づかないバージョンってのがあって。たぶんそれ、そのときのコンディションとかで違うんだと思うんですけど、でも、それに気づくバージョン、つまり『あ、これ前にも見たことある。あ、またこの夢か、なんか知ってるぞ』って思うバージョンと、そう思わないバージョンと、でも、その後起こることはまったく変わらないんですけど、

男「なんか、津波が襲ってくるんですね。でもそれ、ふつうの津波じゃなくて、ふつうのっていうか、津波が町を襲う自体、ふつうじゃないんですけど、っていうか、そういう経験、俺、実際にはしたことないんですけど、でもそういう意味じゃなくて、現実に、物理的に起こる津波とはまったくメカニズムが違って、もっと、なんかエグい津波がくるんですね、

男「どういうふうにエグいかと言うと、その津波って、触れることができないんですよ。つまり、幻覚の津波っていうか、夢のなかで幻覚と違って、なんかヘンだけど、つまりその津波って、ビルを覆うくらいの高さで襲ってくるんですけど、なんか、幻覚の津波なんで、町になんの被害も出ないわけなんですよ。車も流されないし、建物とかも倒れないし。人も溺れないし。でも、周りの人間はけっこうパニックになって、逃げだそうとするんで、じぶんもそれから必死で逃げるんですけど、」

女、悲鳴を上げる。

男「で、俺、必死で逃げるんだけど、周りの人間も必死で逃げるんだけど、どこに逃げるのかと言うと、高いところ、とかじゃなくて、それはいつもノープランなんだけど、さっき、『あ、この夢知ってるぞ』って気づくバージョンがある、って言ったけど、そのバージョンの場合でも、なんか『津波だから高いところに避難しよう』みたいな発想にはならなくて、たぶんそれ、パニックになってるからだと思うんですけど、パニックになるっていうか、それは、津波が怖いからじゃなくて、っていうのも、俺、知ってるわけですからね、それが幻覚の津波だって。襲われても溺れたりしない、実害ないって、知ってるんで。でも、ダメなんですよね。それ、たぶん周りがみんなパニックだからだと思うんですけど。それが、感染しちゃって、どうしてもパニックになっちゃいますけど、」

女、悲鳴を上げつづける。

男「で、俺、結局、いつも、その津波に飲みこまれて、飲みこまれてっていつでも、それ幻覚なんで、飲みこまれても、飲みこまれる前とビフォーアフターでまったく何も変化ないんだけど、ただ、津波に飲まれたっていう事実だけは分かるわけです。なんで分かるかっていうと、その津波の水、なんかすげー黒くて、黒い津波に襲われるんですけど、だから、津波に飲まれると、周りが日蝕のときみたいに暗くなるんですね。それで、あ、今津波に飲まれたな、って、分かる、っていう」

女、振り返って正面を向く。

女「そういう夢なんです」

男と女、立ち位置を入れ替える。

男「あの、ここでちょっと、自己紹介しますね。っていうか、みなさんが俺のこと、どのくらい知ってるのか、ちょっとよく分かってないんですけど、でもさすがに、俺がボ



クシングやってるっていうのは、知ってると思ってるんですけど、で、まず、なんで俺がボクサーになったのか、っていう話から始めたいと思います」

女「まずあったのが、これ、最初の最初に話したと思うんですけど、目に、目についていうか、動体視力？ に、自信があったんですね。わりと。あったっていうか、それは、あの自然体験学習のキャンプの出来事あたりから、なんか急速に生まれてきたものなんですけど。たとえば、」

男「友達と下校するときとかに、ふっと脇の車道を走ってったバスを視界の端で見て、『あ、今のバスに乗ってたの、誰誰のオカンじゃね？』って俺だけ気づいたり、」

女「とか、」

男「休み時間に誰かの机の上で『消しゴムベースボール』やってて、誰かがバカみたいに指で弾き飛ばした消しゴムの行方を、俺の目だけが正確に分かってたり、」

女「とか、」

男「テレビで、なんか瞬間的に映る映像は何でしょう、みたいなクイズが、家族のみんな、分かんないのに、俺からしたら丸分かり、みたいなことがあったり、」

女「とか、そういうことが、けっこう短期間で集中して起こって、あ、これ、俺ちよつとヤバくね？ みたいな。気づくわけですよ。自分の才能に」

男「で、俺が行ってた小学校って、4年のときから部活に入れるようになるんですけど、で、俺、4年のときにはまだ、そういう自分の才能にまだ気づいてなかったんで、自然探検部とかって、訳分かんない部活に入ってる、でそういうの、なんか変更とか効かなかったんで、ウチの小学校。それで、中学に入ってから、野球部に入ったんですけど」

女「野球って、一流選手って、動体視力ハンパないじゃないですか。イチローとか。なんか、調子がいいときは、ピッチャーが投げたボールの縫い目まで見えた、とか言ってる、あ、これ王貞治でしたっけ？」

男「いや、分かんないけど。でも、それとおんなじ経験、俺、してるんですよ。小学生のときに。まあ、それ、相手のピッチャーも小学生だったんで、まあ球速もたいしたことなかったんですけど。でも、けっこう、投げて向かってくるボールの縫い目とか、マジで見えたんで。体育の授業で野球やったときとか」

女「それで、中学のとき野球部入って。これでめきめき頭角を現して——とか思ってたんですけど、なんか、これ、今でも納得できないんですけど、中1の新入生とかって、」

野球部の新入生とかって、まあその業界じゃ常識なのかもしれないけど、球拾いとかしかさせてもらえなかったんですね」

男「いや、まあそれは全然平気だったんですよ。全然平気っていうか、全然じゃないけど、まあわりと平気っていうか。でも、マジで納得できなかったのは、」

女「なんか、小学生のときから野球部だった奴らっていうのが、なんか半年ぐらいで、お前らだけ本格的な練習に参加していいぞ、みたいなことになって。で、小学校で野球部じゃなかった奴らは、もう半年、球拾い、みたいなヒエラルキーができて」

男「そうそう。でも、ぶっちゃけ、小学校で野球部だった、つっても、中には野球部にいたってだけで、ろくに練習に出てなくて、だからほとんど野球経験じゃ俺とどっこいどっこい、ってヤツも中には何人かいて、」

女「でもそういうヤツと、なんか、野球部に在籍してたかどうか、つてだけで、実力と関係なく差別されて。なんだ、これ？ って」

男「なんか、それでなんか嫌になっちゃって、」

女「それで、野球部辞めはしなかったけど、なんか練習とか行かなくなっちゃって」

男「そう。あと、なんかリトルリーグ出身とかってヤツが、なんかちよつと経験あるだけで偉そうにしてるのも、気に喰わなかったし」

女「それで、野球選手になる道は、閉ざされちゃったわけですよ」

男「閉ざされたっていうか、なんか、じゃあ別にいいよ。つて。自分から降りたわけなんですよ」

女「そう。それで、じゃあ代わりに何をしたかっていうと、何もしなかったんですよ」

なんか、野球部とかに出るより、友達とかと街でバカみたいに遊んでるほうが楽しいぞ、っていうのに気づいた、っていうのもあったし」

男「厳密には、何もしなかったわけじゃないけど。筋トレとかは、毎日やってたし。やってたつて言っても、自宅ですよ。自分で目標作って、毎日腕立て50回、とか言つて。あと腹筋とか。あとスクワットとか」

女「本格的なやつは、高校まで何もしなかったんですね」

男「人生の一大転機になったのは、中3のとき、たまたまテレビで見た、辰吉とラバナレスの試合。92年のWBC世界王座統一戦のほうじゃなくて、93年の暫定王座決定戦のほうなんですけど。俺、そっちらからボクシングに入っちゃったんですよ。その試合、序盤から壮絶な打ち合いです。最初は辰吉のほうが動きがよくて、何回ももろに

いいパンチ入れるんだけど、メキシコの野人、ラバナレスには、なんかそれがまったく効かなくて。で、試合後半になると、形勢逆転して、完全にラバナレスペースで、それを辰吉がなんとかギリギリ瀬戸際で堪えてる、っていう、そういう感じで。で、結果は、辰吉の判定勝ち。なんか、そのときは、それまでの辰吉とラバナレスの因縁とかかまったく知らなくて、あとボクシングの技術的なこととかもまったく知らなかったんで、『なんだK.Oじゃないのかよ』っていう。でも、そのふたりの打ち合いに、すごい熱い感じっていうのは、なんかビンビン感じて。それが、ほとんど初めて見た、ボクシングの試合だったんですね」

女「高校に入ったら、その高校にたまたまボクシング部っていうのがあって。それで、そこに入ったんです。やっぱ、あの辰吉対ラバナレスの印象があったし、もちろん、そのころもやっぱり、自分の目に絶対の自信があったし」

男「あと、これけっこう後から分かってきたんだけど、俺、どうもトレーニングっていうか、自分の体を酷使する、っていうのに、向いてるみたいなんですよね。もちろんきつい練習は人並みにきついし、嫌なんだけど、でも、どっか、全拒否したくなる感じはなくて。っていうか、20代の頃とかはむしろ、それなしじゃ生きられない、みたいな時期もあって。ほとんどSMの域かもしれないけど」

女「SMとか言っても、もちろんホンモノのSMは経験したことないんですけど。イメージなんですけど」

男「いや——まあ、俺がSM未経験っていうのは、ちょっと彼女の情報不足というか——まあ、実際はそうでもないんですけど。それはまあどうでもいいんですけど」

女、ちら、と驚いたような表情で男の顔を見て、観客に背を向ける。

男「はじめてボクシングの試合をしたときは、やっぱ、それはもう緊張して。ガチガチに。でもそれ、けっこう、今でもそうで。やっぱ試合って、慣れるってことがないから、けっこういつも、ガチガチで試合に入るんですけど。」

男「俺の初めての試合って、たしか高校一年の秋、県大会かなにかの予選だったと思うんですけど、ガチガチだった割りに、まあ、相手がゲキ弱だったってこともあるんですけど、開始1分とかに、あっさりK.Oで勝ちちゃって。で、それが、すっげー気持ちよくて、それで、まあ、本格的に——本格的にっていうのは、もうそのあとの人生こ

と、とかそういう意味なんですけど、ハマっちゃって。

男「俺、大学は行ってないですよね。高校卒業して——それは、親に高校だけは、って泣かれたりしたからなんですけど——卒業して、それから今のジムに入って、半年後とかにけっこうすんなりプロデビューして。そのころ、前カノに出会ったり、っていうのはあったんですけど、あ、その前カノの話すると、これちょっと自慢になっちゃうんですけど、女子大生だったんですね、その当時。女子大生って、ちょっとステータスじゃないですか？ 俺高卒なんで、なんか特に。高卒が女子大生に、みたいな。高卒が女子大生を、みたいな。ただ、その前カノ、なんか教育大とか行ってたんですけど、なんか最近知り合いづてに聞いたら、今、教師やってるらしいんですね。女教師。女教師って、なんかよくありません？ 今まだ付き合ってたなら、女教師か、とか思うと、ちよつと残念、つつーのは、正直あつて」

女、正面を向く。

女「あの、彼、今はこんななんですけど、私が出会ったときの彼って、なんか、俺ボクシングで世界を獲るんだ、とか言つて、わりとギラギラしてたんですね。私、当時まだ大学生だったんですけど、一応教育大とか行ってたんですけど、大学の周りの男のひつて、そういうギラギラした人いなくて。でも、これ私、すぐ分かったんですけど、彼、根が甘ちゃんなんです。それは、たぶんごくふつうの一般家庭で育ってるんで、ハングリ―精神とか、そういうのが本当の意味ではないからだと思うんですけど。でもそれを言うと、彼、怒るんで、付き合つてるときとかも、私そういうことは一切言わなかったんですけど。

女「でもそういう、半端な感じが、私にはちよつと良かったつていうか。たぶん、本当に世界を獲つてしまうような人だったら、私、引いてしまうというか、私の身には余るというか。だから、そういう人だったら、逆に付き合つたりとか、そういうことにはならなかったと思うんですけど、その点、彼の『オレ世界を獲るぜ』感つていうのは、本当に世界を獲つちゃう人ほどはギラギラしてなくて、マイルドで、その当時の私には、すごく心地がよくて。それで、彼から付き合つてくれ、つて言われたとき、私、わりとあっさりOKしたんですね。

女「彼の試合つて、私一度も見てないんです。彼には、なんで観にこないんだ、とか最初

のころ言われてたけど、私は『人を殴るとか、そういうのは観たくないです』とか言  
って、ぜったい行かなかったんです。それでも、彼、けっこう戦績は良かったみたい  
で、日本ランクっていうんですか？ よく知らないですけど、そういうのにもランキ  
ングされたりしてみたみたいですけど」

男「22戦13勝7敗2分け、4KO。現在までの、俺の戦績なんですけど」

女「あと、ボクシング雑誌に特集されたとか言ってる、見せられたのは覚えてます。特集っ  
ていっても、彼ひとりの特集じゃなくて、次代のホープ特集とかの、しかもけっこう  
後ろのほうの、ほとんど余白みたいところに、私から見たらつけ足してみたいに写真  
が載って、インタビューされた言葉が1行とか2行載ってたっていう、だけなんです  
けど」

男「あの、さっき出てきた俺の今カノっていうか、今カノになりかけ、っていうか、今カ  
ノになりかけつつある女、っているじゃないですか。彼女も、けっこうウザいところ  
がある、っていうのは、もうけっこう周知の事実だと思うんですけど、今話題になっ  
てる——話題になってるっていうか、話題には全然なっていないんですけど、当時付き  
合ってた、いま女教師やってる前カノっていうのも、けっこうウザ系、っていうのが  
あって、なんか俺が試合やるつつつても、『血が怖いから』とか言ってる観にもこないし、  
そもそもボクシングのこととか、興味がないし、最初は俺が『ボクシングで世界を獲  
る』とか言ってたの、グイグイ食いついてきてたのに、ボクシングそのものには全っ  
然興味とかなくて、まあ興味がないのはいいんだけど、別に。でも理解もないし、一  
度、俺、雑誌に特集されたことがあるんですけどね、次代のホープ特集、とか言ってる。  
でも、それ彼女に見せたときも、『ふん』とか言ってる。『あ、ほんとだ、すごいね』と  
か言ってる。でもその『すごいね』って、ぜんぜん感情とかもってなくて。『あ、天井  
の電球に手が届くん、すごいね』くらいの『すごいね』で。マジ、トレーニングが  
つらいときとか、試合に負けて悔しくて精神的にヤバかったときとかも、後押しとか  
そういうの全然なかったし。じゃあ、なんでそんな女と付き合ってたんだ、って話な  
んですけど、俺も。まあ、でもそこは、いろいろ、あるんで。俺も男なんです」

女「それで私、大学3年のときに、彼と付き合ってた2年目のときなんですけど、他に好き  
な人ができて。大学の先輩だったんですけど。その人と、そういう関係になっちゃっ  
て。彼に『あなたとは別れます』って言って。そしたら彼、ふつう、ボクサーとかや  
ってたなら、嘘でも、その男を殴りにいく、とかそういう話になるじゃないですか。話

にはならなくても、口走ったりするじゃないですか。で、こっちも『それだけはやめて』って、必死で止めたり。でもそういう流れ、微塵もなかったですから。基本、彼、根が甘ちゃんなんで」

男、ずい、と女の前に出て、

男「あの、もうそろそろ自己紹介の時間、終わりなんですけど。最後に今から、今は女教師やってるっていう、前カノとやった、いちばん良かったセックスの話をします。

男「場所は、公園なんですけど、それも、街中の、ちよつと繁華街の外れのほうの、そういうので有名なスポットの公園、とかじゃなくて、ふつうに彼女の家の近所の公園なんですけど、児童公園とか言って、そこで、いつもデートとかの終わりに彼女と別れる公園なんですけど、最初はいつもとおなじように、じゃあ、とか言って、お別れのキス、みたいな感じだったんですけど、なんかその日は、向こうも生理前とかでケモノづいてたみたいで、こっちも、試合とか終わった直後とかで、ハメ外していい時期だったんで、なんか、このままヤッチまおうぜ、みたいな流れになって、あの、ゾウの形のすべり台とかあるじゃないですか、児童公園なんで。はじめ、その中に入ってやるうとしたんですけど、ああいうとこって、なんか思った以上に、声が響くっていうのがあって、それですぐヤバイってことになって、ふたりで移動して、なんかブランコの奥とかに、ちよつとした木の茂みみたいのがあって、そこで俺は下だけジーンズをズラして、彼女もスカートのなかのパンツだけ脱いで、バックで、やって、やってる最中に、『ここマジで大丈夫なの？』とか俺が言って、『お前、ここで子どもの頃遊んだりしたところねえの？』とか聞いて、そしたら彼女が、ヤられながら、『ある』よく遊んだ』とか言って、『そこの明かり見える家、同級生の家だ。どうしよう』とか言って、最後、中出しした、っていう話で、最後にします、自己紹介の」

男、女の前から、ふたたび元の位置に戻る。

女、そのまま退場。

男、舞台中央へ。

男「あの、これまで、俺とか彼、とか言って、ボクシングやってる男の話をしてきたんですけど、彼、ここで名前を言つとくと、というの、さっきの自己紹介で名前とか言つてなかったんで。これ、けっこう自己紹介としては致命的なことだと思っんですけど、でも言つてなかったんで、仕方なく、ここで言うんですけど、彼、アオタクンって言つて、年齢とかも自己紹介では言つてなかったですけど、30歳で、なんでボクサーとしては、もう峠を越したつていうか。ボクサーつて、37で定年なんで。定年つていうか、37歳を越えると、協会がライセンスの更新をしてくれなくなるんですね。それでほとんど強制的に引退になるつていう、そういう意味での定年なんですけど、なんで、アオタクンは、これからどう頑張つてもあと7年しかボクシングを続けられないんですけど、で、それから先アオタクンはどうするんだ、つていう。アオタクンのその後の人生を、ここでちょっと考えてみたいと思っんですけど、

男「まず、まともな定職には就けないですよ、きつと。まともな、つていうのは、つまり、彼と同世代の人たちと同じ給与水準の、つていう意味ですけど。そういう意味では、37歳つて、もうバリバリの現役時代で、会社の主戦力つていうか、中核としてやってないといけない年齢なんで、その年齢の新人つて、やっぱ、どの会社も雇つてはくれないですよ。だから、そういう一般的な意味でのキャリアは、まず最初に諦めないといけないわけです。これは、本人も当然分かつてることですけどね。でも問題は、その『分かり方』だとぼく思っんですけど、もちろん、高校卒業して、大学じゃなくてボクシングジムを選択した段階で、彼にはそういうこと、全然分かつてたんですけど、でもそのときの彼の『分かり方』つて、ちよつとリアリティがない、つていうか。だから、まあ、『漠然と』そういうことが分かつてた、つていうのが、妥当だと思っんですけど。その『漠然と』が、年々『切実と』に変わつてくるわけですよ。で、あと7年。ボクサーを引退すると、いよいよ『切実に』分かるわけですよ、アオタクンも。一般的なキャリアはもう無理だつて。とつくの昔に、取り返しつかないことになつてる、つて。もちろん今もそれ分かつてはいるんですけど、7年後にはもつと『切実に』分かる、つてことですよ。

男「で、じゃあ、あとどういふ選択肢があるのか、つていうと、ひとつは、ボクシングの指導者になる、つていう道ですよ。でもこれ、実はないんですよ。アオタクン、別に知名度のある有名選手つてわけじゃないですし、理論的なことつて、彼、じつは

よく分かってないんですよ。そういう部分は、べったり、トレーナーの人に依存してる人なんです。練習方法とかも、自分で決められないし。あと、彼がいま在籍してるジムのスタッフに、彼あんまり評判よくない、つてのがあって。彼、まあこれ、彼のバイト先でも言えることなんですけど、基本、彼、自分本位じゃないですか。だからスタッフの気持ちを考えると、察するとか、そういうところが致命的に欠落してて。だから指導者として、他の選手を指導するとかも、実質問題ムリだと思ってるんですよ。

男「あと残る可能性としては、いまバイトしてる運送会社で、正社員になる、つていうのもあるんですけど、で、実際、アオタクさんがバイトしてる運送会社って、正社員登用制度つていうのがあって、何人かバイトから社員になってる人つていうのもいるんですけど。ただ、さっき言ったみたいに、アオタクさん、致命的に人望ないんですよ。事実、けっこう長く今のバイトしてるんですけど、で、アオタクさん、毎日の仕事で使いモノにならない、つてことは決まってるんですけど、どっちかっていうと、バイトスタッフとしては、デキる部類に入るほうだと思ってるんですけど、思うつていうか、実際そうなんですけど、でも一回も、『お前、正社員にならないか』みたいな話つて出たことはなくて、話が、つていうか、ぶっちゃけ言うと、会社の誰もそういうことを望んでる人がいない、つていうのが真実で。じゃあ彼がバイトしてる運送会社が、アオタクさんという存在をどう捉えているかという、動ける間は動いてもらう、使い捨ての人材、つていう、シビアですけど、そういう評価なんです。

男「で、そうになると、いよいよアオタクさんの『分かっている』つていうのは切実で、分かっているからどうにかなる、つてもんでもなくて、アオタクさん、このままじゃ、もうどうにもならないんですよ。『分かっている』のはいいんですけど。でもなんとかしないと」

女、舞台に戻ってくる。元いた位置に立つ。

女「つていう、今言ったようなアオタ人生プランって、これだけでもじゅうぶん絶望的なんですけど、実はこれ、彼が37歳までボクシングを続けられても、つていうのを前提にして。でもこれ実際問題としては、彼、37歳まではボクシング、続けられないんですよ。

女「それはなぜかという、これは、話がちょっと先週までさかのぼるんですけど、」

男「えーと、先週、先週、先週……そうそう、たしかそのとき、俺、これちょっと下世話



な話なんですけど、セックス、してたんですね。今カノ——っていうか、今カノになりかけ、っていうか、なりかけつつある女と。つまり彼女と（と、女を指す）」

女「そしたら、なんか、ふっと、突然なんですけど、アオタクんの視界の右下に、稲妻みたいなの？ チカッっていうか、キラッっていう感じで、オレンジ色の光が光って。思わずアオタクん、『うわっ』とか声に出しちゃったんですけど、」

男「そしたら下になってる彼女が、『え、どうしたの』とか言ってる」

女「ああいうときって、その直前まで、ハアッハアッとか喘ぎ声とか出してたのに、急に素にもどって『え、なに？』とか言いますよね。女って」

男「ハア、ハア、ハア、——え、なに？ どうしたの？ とか言ってる」

女『あ、いや、別に』とか、彼答えて」

男「なに？ え、どうしたの？ とか彼女が言ってる。彼女、なんか自分に——自分についていうか、自分の体には？ なにか問題があったのか、っていうのが、たぶんそのとき頭をかすめて。ふたりがつながってる部分とか、なんか全体的な感じとか、を、さっと目で見て確かめて」

女「いや、ごめん、ホントなんでもない、とか彼が言っても、」

男「え、なに？ 気になる、とか言ってる」

女「で、なんかこういう問答してるよりも、もうさっと本当のことを言ってる、で、すぐまたセックスにもどう思うか思ってる、『いや、なんか今、目の端に、オレンジ色の光がパツパツ光った感じがして。それだけ』って説明したんだけど、そしたらなんか、思いのほか彼女の方が食いついてきて、」

男「え、なにそれ。ちよっと、詳しく説明して、とか言ってる」

女「説明して、って言われても、俺の、まだお前のなかに入ってるんですけど、みたいに思ってる」

男「そしたら彼女、ちよっと休憩しよ、とか言ってる、なんか勝手に抜いちゃって」

女「で、ふたりで、裸のまま布団のうえに座ってる。仕方ないんで、もう一回おんなじ説明して。そしたら彼女、そのオレンジ色の光って、具体的にどんな感じ？ とかなんか突っこんで聞いてきて。どんなって言われても、別に、ふつうの光なんですけど、とか思ってる」

男「で、まあ、仕方ないからできるだけ詳しく——詳しくっていつても、パチツとした感じ、とか、蛍光灯が一瞬つこうとして、なかなか点かないときみたいな、とか、雷が

走るときみたいなのとか、なんかぼんやりして、あんま詳しくって、なかなか言えないんだけど、それじゃあ彼女納得してくれなくて」

女「でも、なんか、うだうだ言ったら、なんか急に納得してくれて」

男「でも納得したらしたで、それから、急に考えこむ、みたいになって」

女「そう。なんか、パソコンで検索かけてたら、検索してると思ってたのにいつの間にかフリーズしてた、みたいになって」

男「動かなくなって」

女「そう。それで、やっと顔を上げて、彼の顔を見たと思ったら、『それ、啓示かもしれない』とか言ってる」

男「え、ケイジって何？ って聞いたなら」

女「啓示。ほら、神の啓示、とか天使の啓示、とかって言うでしょ。とか言ってる」

男「え、何それ、って聞いたなら」

女「あ、もちろん、天使とか神とかは、今は関係ないんだけど。でも、形而上の存在による、何らかの啓示だと思う」

男「で、俺、なんでそう思うの、って聞いて」

女「あのね。本当はこういうの、本人に言うべきじゃないんだけど。私、じつはここ数日、

あなたのために〈お祈り〉してたの」

男「とか言い出して、え、なにそれ、とか思ってる」

女「あ、へんなふうにとらないでね。〈お祈り〉、っていっても、神さま、とか、アーメン、とか、そういうのとは無関係で。何ていうのか、自然界の、エネルギーってあるじゃない、宇宙とか地球を動かしてる、世界の根源的なエネルギー。それと意識的に関係を結ぼうとする行為を、便宜的に〈祈る〉って言うてるだけなの。他に適当な語彙がないから。で、私、ここ数日、あなたのことを〈祈って〉たわけ。あなたが、というか、あなたの人生が、もうすこし密接に、宇宙の根源的なエネルギーと結ばれるように。分かるかな？」

男「あ〜……」

女「あ、別にね。それは特別なことではなくて。たとえば、運のいい人生、ってあるじゃない。それって、宇宙エネルギーとの関係性とか、そういうところを見なかったら、ただ運がいい、悪いで終わっちゃうんだけど、でも本当はそうじゃないよね？ それは、実は意識的に関係を結ぼうと思えば結べるもので、だからいろんな分野で成功し

た人が、運を引き寄せた、とか、そういう言い方をするでしょ。でも意識的にそういうエネルギーと関係を結ぼうと思えば、文字どおり、『意識』しないと始まらないわけ。誰だって、存在を知らないものとは関係を結べないでしょ？ でも残念なことに、現代に生きている日本人のほとんどは、そういうものの存在を知らないわけ。だから生き方が、刹那的で、享樂的で、行き当たりばったりになっていくの。これは必然なの。あ、誤解しないでね。これは、あなたの生き方を批判してるんじゃないの。ただ、そういう存在をあなたにも知ってもらえれば、って、私は思うの。なぜ思うかというと、それはあなたを愛してるからなの。愛してるとか言って、それも『重い』とか、そういうふうにとらないで欲しいんだけど、だって、愛する、っていうのはすごく自然なこと、ナチュラルで、日常的で、エネルギーに満ちてて、ごくごく一般的な感情なんだから。本来はね。でも今は、現代は、その本来的なものが忘れられて、だから愛する、とかいうと、重い、とかいう反応になったりするんだけど。これ、伝わるかな？ でも、伝わるでしょ？」

男「あゝ」

女「で、話を戻すけどね。あなたが見た光って、要は、そういう根源エネルギーからの啓示じゃないかと思うの。それは、昔から神の啓示とか、天使の預言とか言われてたのと同じ現象なんだけど、ただ、誤解しないでほしいのは、私はこの世に神とか天使がいる、って思ってるわけじゃなくて、それは現れ方の問題なの。だって、考えてみて？ もし根源エネルギーが、ある個人になんらかの働きかけをしようとして、実際に働きかけをしたとしましょう？ でも、その人のほうは、まだ根源エネルギーという存在を知らない。そうすると、さっき言ったように、まともな関係は結べないわけ。だって、関係を結ぼうとする当の相手の存在を知らないんだから。それで、根源エネルギーからの干渉を受けとった人間のほうが、勝手に、それを神とか天使の声とかって、勘違いする、っていう、そういうメカニズムなの。だから、世界にはいろんな宗教があって、いろんなことを言っているけど、それらは実はおなじもので、ただ根源エネルギーの存在を知らないことからくる誤解で、誤解っていうか、解釈の違いで、それどころな顔を見せているだけなの」

男「って、彼女が語りだして、まあ、実際にはこの10倍くらいの講釈がこのあと続くんですけど、それはバツサリ割愛して」

男、女のほうを見て、一礼。

男「ありがとうございます」

女、どういたしまして、と礼を返す。

男「結論を言うと、さつき見たオレンジ色の光、あれ網膜の異常だったんですね」

男と女、観客に背を向ける。

溶暗。

溶明。

まぶしい光が、無人の舞台を照らす。

女が現れ、舞台の端に立つ。

女「ここでちょっとだけ、軽く、網膜剥離っていう病気について、ほんの触り程度に、説明しとこうかな、と思うんですけど。ちょっとだけお時間よろしいでしょうか？ あ、網膜剥離とか言って、アオタクん、まだ自分が網膜剥離だった、なんて一言も言っていないんですけど、たぶんこれから言うことになるとは思うんですけど。なので、わたしからあんまりここで、先走って言わないほうがいいかもしれない——というより、言わなかったほうが良かったかもしれない、と思うんですけど、思ったんですけど、でももう言っちゃったんで、もうこのまま先走って言っちゃうんですけど。

女「さつきアオタクんが見たオレンジ色の光、っていうのは、実は網膜剥離の初期症状のひとつなんです。網膜剥離って、ことばの通り、網膜が剥がれる病気なんですけど、特発性網膜剥離とか続発性網膜剥離とか、種類としてはいろいろあって、じゃあアオタクんの場合は何かっていうと、まあこれからちゃんと診察すれば、はっきりすると思うんですけど、たぶん特発性網膜剥離、って呼ばれるものなんです。簡単に言えば、頭とか、あと眼の周りとか？ に強い衝撃を受けることで、網膜に裂孔っていわ

れる孔があいて、そこに目玉のなかに詰まってる水が入りこんで、網膜が剥がれちゃうっていう。まあボクサーでよく聞くあれなんですけど。で、網膜が剥がれちゃうとどうなるかと言うと、まあ、ふつうに眼が見えなくなるんですね。視野が欠損するとかいって。失明とかいって。眼がモノを見るメカニズムって、乱暴に要約すれば、ようするに網膜に映った光が、視神経を通って脳内で像を結ぶ。だからモノが見える、っていうことなんですけど、だから網膜が剥がれちゃえば、もうモノは見えないわけです。

女「で、その網膜がまだ剥がれてはいないけれど、剥がれかけ、っていうか、剥がれかけつつある、っていう段階で、その網膜を剥がそうとする力が刺激になって、実際には存在しない光を錯視してしまったりするんですね。光視症っていうんですけど。あと飛蚊症って言って、蚊が飛ぶ症状って書くんですけど、黒い点？　みたいな、黒い線？　糸クズ？　みたいなものが、眼のまえを飛んでるように見える、っていうのも、初期症状としてあつたりするんですね。みなさんも、ためしに目の前の白い壁、見てもらうともしかして見えると思うんですけど、黒いミジンコみたいな？　半透明の線虫みたいな？　の、見える人もいると思うんですね。どうですかね？

女「あ、でももしそういうのが見えた人がいても、それだけではべつにそんなに心配いらないうか。っていうのも、その飛蚊症があるからって、必ず網膜剥離になる、っていうものでもないらしいんですね。生理的飛蚊症って言って、網膜剥離の初期症状とは別モノで、子どものときから黒い点みたいなのはけっこう見えてたぞ、っていう人は、たぶんそっちなんですね。なのでそんなに心配はいらないんですけど——まあ、もしも、つてこともあるんで。万が一、つてこともないとか限らないんで。心配なひとは、ふつうに眼科に行ったほうがいい、と思うんですけど。というような感じで、ほんとに触りですけど、説明、終わります」

女、一礼。

溶暗。

溶明。

舞台上に男と女が並んで立ってる。

男「じゃあ、アオタクの話、続けます。今、話題になってる網膜剥離？ については、これ一応話の本筋、なんで、タイトルにもなってるくらいなんで、まあ追々あると思うんですが、ここではちよつと角度を変えて？ アオタクの、今カノっていうか、今カノになりかけているか、なりかけつつある女、っていう人がいて、まあ、あのスピリチュアル系の人のことなんですけど、それ、どういうふうに知り合ったのか、ふたりは、っていう話をすると、あの、アオタク、ボクサーだって話、したじゃないですか。で、やっぱ試合とかあるわけですよ、当然ですけど。最近は、年2回とかのペースで、試合組んでもらえてるんですけど、それで、トレーニングとか、一般人から見ると普段から十分キツイトレーニングしてるように見えるんですけど、試合の前って、そこに減量とか加わって、やっぱ、肉体的にはすごくハードなんです。で、そういう生活を1年365日続けて、しかもそれを10年とか続けてるわけ、なんか、アオタクの身体って、やっぱ身体的にも、たまに気がおかしくなる、みたいなことがあるわけなんですよね。

男「具体的に言うと、彼の場合、それは性欲なんですけど、年に2回くらい、なんか狂ったみたいに性欲が爆発するとき、っていうのがあって、あ、これは、別に試合の時期とかとは、あんまり関係なかったりするんですけど、経験的に。で、アオタク的にはそれ、絶対人に言えない秘密だったりするんですね。何でかって言うと、それ、自分じゃコントロールできなくて、ヤバ、このまま夜まで放ついたら、俺ぜってー誰か犯す、みたいな日が、だいたい年に2回くらいあって、そういうとき、最初のころは風俗とか行ってたんですけど、風俗って、基本時間制じゃないですか。もちろん延長とかできるとは思ってますけど、でもそんな金銭的に余裕のある生活してるわけでもないんで、それはちよつとしんどいな、とかあって、だから風俗とかじゃむしろ逆効果っていうか、なんか下半身に火を点けるだけで終わり、みたいな経験をして、それからは、風俗とかやめて、前カノと付き合ってたときは、前カノと会って、会えない、とか言われたときでも、なんかもうむりやり前カノの部屋に乗り込んでいって、ひたすら、チン魂の儀式に明け暮れたり、でも前カノと別れてからは、出会い系とか、もうなりふりかまわってられないんで、ぶっちゃけ、そういうときって、女の子の容姿とか年齢とかって、けっこうどうでもよくなってるんで、もう手あたり次第って感じで、出会い系で出会いを求めたりしてたんですけど、

男「で、今年の正月明け、またそういう状態になっちゃったんですね。でもそれ、間が悪

いことにバイトの給料日、直前とかで、しかも正月にそこそこの贅沢とかして、金、もしかしたら1年間でいちばん無いときかも、今が、っていうバッドタイミングで、マジヤベーとか思っ、どんなにかき集めても、ホテル代ギリギリくらいしかねーよ、これどうするよ？ っ、感じて。でもお金ないのはどうしようもないんで、とにかく女がいるとこに出よーとか思っ、電車に乗っ、街に出て——」

女「あの、この話、このまま彼、アオタクんの側から続いてもいいんですけど、でもそうすると、けっこうあんまり面白くないんで、ここからは、アオタクんの今カノっぼいって彼女、カッコこれはアオタクんの自称なんですけど、その彼女、イワイさんっていうんですけど、そのイワイさん側から、話をしたいと思うんですけど、

女「えーと、イワイさん。あ、これは、今からする話とはあんまり関係ないんですけど、小学生のときとか、イワイさん背が低くて、今ではまあ、一般女性の平均身長、一応あるんですけど、でもそれは、中学生のときに急激に身長が伸びたからで、小学生のときは、いっつも列のいちばん前、みたいな感じで、背が低くて、」

男「要するに、身体の発育が、子どもの時あんまりよくなって、」

女「さっき、っていうかかなり最初のほうで、アオタクんの小学生のころに、トベさん、っていう、顔も可愛くて発育がよくて、って子の話が出てきたと思うんですけど、でもイワイさんは背が低くて、けっこうそれ、コンプレックスだったりしたんですけど、ふつうに。で、やっぱり発育があんまりなくて、初潮とかもくるのも、けっこう遅くて、」

男「で、それと関係があるのかどうかは、不明なんですけど、っていうか、あんまり関係とかないと思うんですけど、初体験も、けっこう人より遅くて。あ、人っていうのは、この場合、イワイさんの周りにいた女子たち、っていう意味なんですけど、でも、たぶんそういう統計はとってないと思うけど、もし仮に国とかで、日本女性の初体験の年齢とかの統計をとってたとしても、イワイさん、たぶん平均値よりだいぶ遅いほうだと思うんですけど」

女「それが何歳のときだったかという、と、それ、26歳のときだったんですけど」

男「いや、それか、もしかしたらとってんのかな。そういう統計。なんかそう言われたら、とってるといふ気もするんですけど、文科省とかいって。厚生労働省とかいって」

女「それは、まあいいんですけど、イワイさんの初体験の年齢も、これからの話には関係ないです。イワイさん、みなさんもちよっただけさっき体験したと思うんですけど、体験というか、アレしたと思うんですけど、イワイさん、人を救うのが趣味なんです

ね。救うと言っても、レスキューとか、そういうのじゃなくて、精神的に救済するのが趣味なんですけど。あ、って言っても、専門的な臨床心理学とか勉強したわけじゃなくて、まあそういうのをちゃんと勉強する人っていうのは、人を救うのを仕事にしたりするんで、イワイさんの場合は、あくまで趣味なんですわね。だから、本格的なカウンセリングとかじゃなくて、スピリチュアルの力で救うわけなんです。ほら、スピリチュアルって、なんていうか、趣味的じゃないですか、全体的に」

男「イワイさんのすごいところは、人の精神的救済を、趣味だって自覚してるところで、間違っても自分の生活を投げだそう、とか思わないわけですよ。あくまで趣味なんです」

女「どうしてそういうことを趣味にしているかという、彼女、もう精神世界歴長いんですけど、宗教とか自己啓発セミナーとか一通り渡り歩いて、渡り歩いてるうちに、人に救済されるより、人を救済したほうが、精神衛生上いいぞ、っていうのに気づいちやったんですね。セミナーとか行つて、隣の人とかと雑談したりすると、やっぱり悩みの打ち明けあい、みたいになつたりするんですけど、そのときに悩みを打ち明けるより、人の悩みを聞いているほうが、あれ？ 心が救われるぞ？ っていう、すごい発見を彼女、して、それで人の救済を趣味にするようになった、っていう。

女「でも、なかなか人って、救えないわけですよ。なんか、『誰かオレを救ってくれ』とか言ってる奴って、だいたい身勝手なのが多いいんで。だから最初のころは苦労ばっかで、ぜんぜん報われないこととか続いたんですけど」

男「そんなとき、イワイさん、第二の重大発見つてのをして。どういう発見か、っていうと、救済対象と身体の関係が結びと、けっこう成功率高いぞ、っていう発見を、今から約一年前くらいにして」

女「だから、イワイさんが救済するのって、実績でいうと、男女比で圧倒的に男の割合が多くて」

男「あ、この場合の『救済』の定義なんですけど、まあこれは、当然なんですけど、すごく主観的評価基準が適用される、っていうか、つまりイワイさんが『はい、救済！』って思えばそれでワンカウント、っていう、まあすごくアバウトなものではあるんですけど。本当にそれでそいつが救済されたかどうかは、別に関係ないっていうか、まあ、それで別にいいんですけど、イワイさんには、趣味なんです」

女「でも、そういうイワイさんの独善的救済って、続けてたら、いつかぜったいトラブルになるじゃないですか、ふつうに考えて。っていうか、なったんですけど。それ、ど



ういうトラブルかという、イワイさんのそのとき所属してた団体の幹部が、イワイさんがそういう行為をしてるっていうのをどっから聞きつけて、『お前、信者の分際で勝手なことをするな』って激怒して、イワイさん、すごい罰みたいなのを受けさせられそうになって、『お前はサタンにとり憑かれている』とか言われて、拷問みたいな受けさせられそうになって、逃げ出して。ってことがあって、イワイさん、その団体を破門されたんですね」

男「一説には、けっこうな拷問を実際に受けた、って説もあるんですけど」

女「それで、イワイさん、そういう団体とかのなかにいれば、問題を抱えた人が勝手に集まってきてくれたんですけど、そういう環境じゃなくなって、じゃあどうやって救済対象を探そう、って途方に暮れた時期があつて。ちやうどそういうときに、たまたま、街を歩いてたんですね」

男、架空の女に向けて、ナンパしだす。

男「ねえ、彼女、ちょっと話——、ねえねえ彼女、ちょっと——」

ナンパはまったくうまくいかない。

女、男のほうに歩いていく。

男「あ、ねえ彼女。ちょっといい？」

女、立ち止まる。男、ちよつとびっくりして、

男「お。あ。ちよつと、今、いい？」

女「なんですか」

男「お。いや。ちよつと、話したいんだけど、今いい？」

女「なんですか」

男「お」

女、男から数歩離れて、元の位置に立つ。

女「つていう感じで、声をかけられたんですけど。その声をかけてきた男つていうのが、まあアオタクンで。でその声をかけられた女つていうのが、まあイワイさんで。そのときのイワイさんが、どういう精神状態にいたかというところ、イワイさん、そのとき、街の邪気払いのために、呼吸数を極端に抑えてて——あ、これどういうことかというところ、電車で街に着いたときから、ふつうに呼吸とかしちゃうと、街の邪気に肺が冒されてしまうじゃないですか。街つて、やっぱいろんな人間の思念が渦巻いてるんで。それで、その対策として、息を止めるわけですね。息を止めるつていっても、ずうっと止めとくと、人つて死んじゃうんで、限界まで息を止めて、限界が近づいてきたら、人混みからなるべく遠いところに離れて、ゆっくり息を吐いて、息を吸って、また息を止めて、つていうのを繰り返して。徐々に、街の邪気に肺を慣らしていくわけですね。実際にやってみたら分かると思うんですけど、それやると、自分の身体のまわりに、うすい膜みたいなのができて、それが、街の悪い空気から自分を守ってくれてるな、つていうのが分かるんですね。でも、その副作用つていうか、当然なんですけど、呼吸数を極端に抑えてるんで、脳の酸素が足りなくなつて、なんかぼう、として、ひどい時とか、ふらふらして貧血みたいになったりするんですけど、でもそれ、訓練でだいぶマシにはなるんですけど。なんか、視界がすごく狭くなつて、自分が歩いてる半径何メートルか、くらいしか見えなくなつて。で、その見えてる範囲に、急に入ってきた男つていうのがいて、それが（男を指して）彼だったんですけど、なんか、ねえ彼女、ちよつといい？ とか言つて、なんですか、つて聞き返すじゃないですか。急にそんな声とか掛けられたら、反射的に。そしたら、お、とか言つて、ちよつと話したいんだけど、今いい？ とか言つて、なんか微妙にキョドってるんですけど、ね。私、そういうところ、目ざといんで」

男「そうすると、イワイさん、眠つてた救済欲求つていうのが、頭をもたげるわけですよ。

ムクムクと」

女「話ですか、いいですよ、別に」

男「お。マジで？ え。マジで？」

女「なにかマズいですか？」

男「お、いや、ぜんぜん。ぜんぜんマズくない——とか言つて、ほんとにはマズいわけですよ。なぜかというところ、このときアオタクン、ほんとにホテル代びたりくらいしか所

持金持ってなかったんで。話するとか言っつて、道ばたでするわけにいかないじゃないですか。でも下手にカフェとか行つたら、ちよつと割高なんちゃらマツキヤートとか飲んでたら、もうホテル行けないぞ、みたいな。最悪、女とホテル代割り勘にする、つていう手もなくはないですけど、それ、けっこう禁じ手だと思っつて、男としてやっぱり」

女「じゃあ、どこか入る？」

男「あ、や、うん、えつと——」

女「何？」

男「ここで、アオタくん的には、ふたつの考え方があると思っつてですよ。ひとつは、カフェとかドトールとか、最低でもマツクとかに行つて、うまく話を盛り上げて、そのあと安い居酒屋とかに誘導して、なんとか彼女とホテル行くのにつなげる、つていう正攻法。この場合、たぶん手持ちの資金はその段階までで使い果たしちゃうんで、ホテル代は彼女に立て替えてもらわないといけなくなるんですけど。まあ、それはアオタクん的には目的を果たした後のことなんで、どうとでもなるかな、と。そういう考え方も、もうひとつは、むしろもうこのままホテルに誘つちゃう、つていう発想ですよ。もちろん成功率が劇的に低いとか、むしろ成功するほうが奇跡に近いとか、そういうデメリットについては十分分かつてるんですけど、でもぶつちやけ成功率とかどうでもよくね？ つていうところが、このときのアオタクんにはあつて。とにかくもう、アオタクん的には尻に火がついてたんで、言っちゃうわけですよ。つていうか、言っちゃつたわけですよ」

女「え。なに？ ホテル？」

男「そう。ホテル。つていうか、ラブホ。ほらカラオケとかあるし、なんかよくね？」

女「あー、なるほど。……悪いけど私、そういうのはちよつと」

女、男から遠ざかろうとする。男、慌てて回り込む。

男「ああ、マジ、そうだよ。そりゃそうだよ。いや、マジごめん。いや、うん、それは、そうだと思つた」

女、正面を向く。

女「そうだと思った、とか言ってる。何をどう思ったんだよ、とか思ったんですけど、そして、彼、なんか『そうだと思った、っていうのは、つまり、どういうことかと言うと』とかいって、自分のことを話しはじめて」

男「そう。どこから話しはじめたかと言うと——生い立ちから話しはじめたんですけど」

女「自分は九州の、村から町に変わったばかりみたいいな山間の田舎で生まれて、母親は生まれつき右腕が不自由で、みたいな話を、延々するわけですよ、路上で。小学校の低学年のころに一時期いじめにあった、とか、自宅での筋トレをいついつから始めた、とか、それから今日まで一日も欠かさず続けている、とか、昔から眼に自信があった、とか、」

男「とにかくこっちはもう、必死ですからね。話が途絶えたら、その瞬間、彼女行ってしまおうと思ってるんで。もうあることないこと、思いつくままに話しまくるわけですよ。

なんか途中からアドレナリンとか出てきて、あれ、俺こんなに話うまくいったわけ？ とか思ってる。あと、ために、途中で途中で『で、ホテルどうする？』とか聞いてみて、」

女「あ、それはいいです」

男「とか、あっさり断られて、みたいなことを続けて、どのくらい続けたかというところ、最終的には——最初に彼女に声かけたのがたぶん昼すぎとか、お昼は回ってたけど1時とか2時にはまだなってる、くらいとときで、話の最後のほうには、ネオンとかふつうに点いてたんで、たぶん7時とか、そのくらいだと思っんですけど。さすがにそれだけ話していると、アドレナリン出っ放しで無敵状態ではあるんですけど、喉とかさすがに涸れてくるんで、だんだん話も聞き取りずらくなってくるんですけど。彼女もだんだん立ってるのがしんどくなってきたのが手に取るように分かってきて、そうなる、もう話を続ける目的が変わってきて。なんかもう狩獵？ みたいに、こうなったら、とにかく相手を弱らせるだけ弱らせて、機を見てガブツと喰らいつく！みたいな。で、機を見て、ここぞというタイミングで、勝負に出てみたわけですよ。

男「っていうか、話、これまだまだ続くんですけど、もう立ってるのヤバくね？ もうどっか入って休みたくな？ どっかって、もうホテルしかなくね？」

女「や、だから、それは——」

男「いいって。マジもういいって。それしかないって。なんでもないから。休も。なんもしないから。行こ。さ、行こ」

男、女の手をとって歩き始める。女、引きずられるように付いていく。

男「そしたら、抵抗とかせずに付いてくるわけですよ。うわ、マジ、これ、キターとか思  
って、でも勝負はラブホの入口くぐる時だ、って思ったんで、もうラブホ入る瞬間に  
両手で彼女の腕掴んで、有無を言わず中に引きこんで——引きずりこんで——」

男、女を引きずりながら舞台袖に消えていく。

女、しばらくして舞台中央に戻ってくる。

女「とにかく、もう座りたかったんです」

溶暗。

溶明。

舞台に女がひとりで立っている。

女「あの、ここでちょっとだけ、突然ではありますが、眼、についての話をします。あの、  
これは中学生のころになってくると、っていう話なんですけど、なんか、中学生とか  
になってくると、男子とかの眼とかって、気になりだすじゃないですか。まあ小学生  
のときもそうなんですけど。で、基本的には、ウザイじゃないですか、男子の眼って。  
ちよつと他の女子より発育がよかつたりすると、それだけですぐ話題とかにして、そ  
れも、男子たちはなんか裏でコソコソ、みたいな感じで話していると、自分たちでは思  
ってるんだけど、女子から見るとそれ、けっこうあからさま、っていうか。基本、頭  
悪いの多いんで、男子って。あ、でもそれはべつに私の周りだけかもしれないだけ  
ど、頭悪いの多いって。頭のいい男子も、論理的に考えて、どこかにはいるはずなん  
だけど、じゃあ頭のいい男子、どこに隠れてんの、って感じなんですけど。私の眼に  
入る範囲にはいないんですけど、みたいな。

女「あ。あの、今からする話——っていうか、今してる話っていうのは、何回かこれまで名前だけ出てきた、トベさんて女の子の話なんですけど、だから、まあはじめから言っとくと、これって、まったく、完全な、余談の話なんですけど。」

女「トベさん、中学校に入っって、1年か2年くらいして、街を歩いてて、1回だけ、アオタクんと偶然すれ違ったことがあるんですね。あ、でもこれ、トベさんのほうはまったく気づいてなくて、だから街でトベさんとすれ違ったの知ってるの、世界中でアオタクんひとりなんですけど。そのとき、トベさんとアオタクんって、学区の関係とかで別々の中学行っって、だからほとんど中学に入っってから、顔合わせること自体、まったくなくて。でもその日はたまたま、街を歩いててすれ違っって。でもトベさんは全然気づいてなくて、それに気づいたの、アオタクんだけなんですけど。そのとき、トベさんどこに行こうとしてたかという、そのとき一人だったんですけど、トベさん、単館系の映画をミニシアターに観に行くところで、トベさん、そういうの結構好きなのうなんですけど、そういうアート系？ サブカル系？ の映画観るの、好きなんですけど。でもそういう趣味って、友達とかに言うのって、ちょっと微妙なんで、それで内緒っていうか、トベさん、そういうところには一人で行くことにしてるんですけど。でもそういう一人でコソコソ、みたいな感じを、トベさんは後ろめたくっていうか、なんかオタクっぽいと自分では思っって、それもあっって、そういう趣味があることをトベさん、友達とかにも言っってない、っていうのがあるんですけど」

男、女の話を邪魔しないように、ゆっくりと下手から現れる。

女「そのとき観に行っしたのは、イギリスの映画で、不眠症の主人公が、なんか急に時間を止められるようになる、っていう映画だったんですけど、で、時間を止めて、その主人公、男の人なんで、なんか時間止めて女の人の服を剥いて裸にする、みたいなエッチな場面が、途中にあったりする、映画だったんですけど、一人でそれ観てて、そのときは、劇場の後ろのほうの端っここの席で観てて、トベさん、けっこう映画観るときこだわりがあっって、劇場の中央で観るのも、音響のこととか考えると、もちろんいいんだけど、でもトベさん的には、劇場の後ろのほうの端っこ、それは右手側でも左手側でもどちらでもいいんですけど、とにかく端っこから観る、っていうのが、一番映画のなかの時間にフィットするっていうか、映画の世界にすんなり入れる、っていう

経験則があつて、それでその日も、後ろのほうの端っこの席に座ってたんですけど。そしたら、なんか、その日そんなに混んでたわけじゃないんですけど、隣に座ってる男の人がいて、その人、映画が始まったときは別の席に座ってたんですけど、なんか、映画が始まって十分とか、十五分とかで急に移動とかして、こっち向かってきて、『え』とか思ったんですけど、『うわ』とか思ったんですけど、なんか隣に座ってきて、でも別になにをするでもなかったんで、映画観てたんですけど、気が散るな、とか思いついながら、イラッとかしながら、映画観てたんですけど、そしたら主人公が、止まった時間のなかで女の人の服を脱がしていつて、でも、実際そのシーン撮影するときは、時間って止まってないわけじゃないですか、当たり前ですけど。だから、その服を脱がされる女優さん、一応、時間が止まってるっていう体で姿勢を固めて、動くまいとするんですけど、どうしても微妙に動いちゃって、そうするとこういう映画って、台無しなんですよね、リアリティが。っていうのを、でもまあそれはそれで別の意味では面白い、とか思つて観てたんですけど、そしたら、急に隣の男の人が、顔近づけてきて、『騒ぐなよ』つて言つて、『え』とか思つたんですけど、すぐまた元の姿勢に戻つたんで、『え、なに?』とか思つて、急に怖くなって、そしたら、その人の手が、脚の上にポン、つて置かれて、『ええ?』とか思つてその人の顔見たら、なんかすごいガチンコ系? ガテン系? みたいな人で、怖くて、どうしよう、どうしよう、とか思つて、そしたらその人の手が、ぐい、つて太股を握つて、思わず声出しそうになつたら、また顔近づけてきて、『騒ぐなよ、いいことないからな』つて言つて。もう怖くて、逆らうことできなくて、それからあと、ずっと俯いてて、映画とか全然観てなくて、たまたま早く時間過ぎて! 早くもどつか行つて! つつと思つて、思つてる間、その人の手、だんだん股間に近づいていつて、男の人の鼻息とか、聞こえてきて、そのときジーンズ穿いてただけで、ジッパーを開けられて、そこから指が入つてきて、なんか指をねじこむ、みたいな感じで、じかに触られて——」

男「つていう話は、じつはトベさんの実体験の話ではなくて、トベさんと街ですれ違つた日の夜、アオタクさんが頭のなかで展開した妄想の話だったりするんですけど、なので、このあとトベさんは、男にトイレに連れ込まれて、犯されます」

女「つていう」

溶暗。

溶明。

舞台上に男と女が並んで立っている。

女「えーと、なんか途中で余談とかいって、入っちゃったんですけど、いよいよ、アオタクんの、網膜の異常について、に話を戻します。まず、オレンジ色の光が視界の端に見えた、というところまでは話したんですが、じゃあ、どうしてそれが網膜の異常だつて分かったか、という話なんですけど。まあ、ふつうに眼科に行ったから分かったっていう話なんですけど。じゃあ、どうしてわざわざ眼科に行ったかと言うと、それは、アオタクんの目が、ついに壊れちゃって、オレンジ色の光どころじゃないものが見え始めたから、なんですけど、」

男「あのお、ぼくの友達で、霊感がめっちゃ強いつてヤツがいるんですね。どのくらい強いかと言うと、たとえば、これは最近彼が街で偶然、小学校のときの同窓生に会ったときの話なんですけど、『おう、久しぶりー!』とか言つて、偶然小学校のときの同窓生を、街で見つけたんですけど、『え、なに、お前このへんに住んでんの、今? マジで?』とか言つて、あの、正直、そのとき会った同窓生っていうのは、小学校のときはそんな親友ってほどの友達じゃなかったんだけど、でも顔見たら、『あれ、あいつ』とか分かる程度には友達だったんだけど、その同窓生と、なんか話が盛り上がって、そのときのノリで。それで『せっかくだから飲みに行こうぜ』とか言つて、一軒とか、二軒とか、飲み歩いて、盛り上がって、で、夜中の、ほとんど朝方近くまで飲んでたんだけど、朝方とか近くなったとき、『じゃ、俺そろそろ』とかその同窓生が言つて、『そろそろ始電出るんで、このへんで』とか言つて、別れたんですね。で、それからいつ、そいつっていうのは、霊感があるほうの、ぼくの友達のほうの彼のほうのほんだけど、そいつは歩いて帰れない距離じゃなかったんで、電車とかタクシーとかじゃなくて、歩いて家に向かい始めて、そしたら、なんか線路沿いの道で、踏切に通るかかって、その踏切、しょっちゅう事故とか起きるつていう、地元では有名な踏切で、そこ、ふつうに霊とかが集まつてるの、そいつには見えるらしいんだけど、なんか悪い霊がいっぱい集まつてるらしいんだけど、だからそんなときも『ああ、またいっぱい集まっ



てるなあ』とか思って、でも酔っぱらってるじゃないですか。だから、いつもならぜったい近づかないんだけど、『なんか面白れ』とか思って、あいつら何あんなに集まってるの、ウケる、とか思って、近寄って行って、そしたら、さっき別れたはずの小学校の同窓生が、その霊のなかに混じって、ぼう、とかいつて立って、『お、なに、お前、なんでここいんの?』とか驚いて、『なに、お前まさか死人だったの?』って驚いて、『マジかよ。じゃあ、俺、さっきまで、幽霊と一緒に酒飲んでたのかよ。ていうか俺、周りから見たら一人でバカみたいに騒いで盛り上がって、居酒屋とか行って、カラオケとか行って、完全に危ないヤツじゃん!』とか思ってたら、その同窓生の幽霊が首ふって、『いやあ俺さ、さっきお前と別れたあと、駅の階段踏み外して死んじゃった』とか言って、『マジかよ』とか言って、『それマジかよ。だって5分前に別れたばっかじゃん。お前5分で死んだのかよ』って言って、思わず吹き出しちゃって、そしたらその同窓生のオバケも『笑うなよ』とか言って、照れ笑いみたいに笑いだして、『お前さっき死んだとかって、超早業じゃん。たった5分しか経ってないんだけど。マジうけるんだけど』とか言って大笑いして、そしたら笑いが止まらなくなって、そしたら、なんか周りのオバケたちにも、それ伝染して、なんか朝っぱらから一団のオバケたちと爆笑してた——っていうくらい、靈感が強い友人が、ぼくにはいるんですけど、ちなみに今の話、アオタクんのあれとは、ぜんぜん関係なくて、なんでぜんぜん関係ないかっていうと、アオタクんの目に見え始めたもの、ていうのは、オバケとか、幽霊とか、そういうスピリチュアル系? とは、まったく関係ないものだったからなんですけど」

女「じゃあアオタクんの目に、何が見え始めたのかと言うと、これ、残念ながらなんかわたしにはうまく説明できないんで、アオタクん本人の口から説明してもらったほうがいいと思うんだけど、」

女、男のほうを見る。男、少し〈キョド〉って、

男「え、あ、そう? えーと……じゃあ説明すると、見えた、っていうか、見え始めた、っていうか。それが、いったいいつから見え始めたのか、っていうと」

女「えーと……それがいったいいつ見え始めたのかと言うと、あのお、うちの近所って、基本坂とか少なくて、『平野』って感じなんですけど、ただウチからちよっと離れたと

ころに小高い丘があつて、そこ、丘のてっぺんに神社がある丘なんだけど、で、その神社まで、丘のふもとからほとんど『一直線』って感じで階段が伸びてて、それ、100段とか200段とかある階段なんだけど」

男「あ、ちなみに今の100とか200っていう数字は、テキストで、印象でものを言ってるんですけど。とにかくけっこう長い階段があつて、丘のてっぺんまで一直線に続いてるっていう場所があつて、」

女「で、毎週、週の後半、つまり水木金は、体に負荷をかけるために、朝のロードワークのときその階段を上ることにしてて。もちろんこれトレーニングなんで、ふつうに歩いて上るんじゃないなくて、駆け上がるんだけど、」

男「で、その朝もその階段上つてて。ぐわー、とか言つてダッシュで駆け上つて、それめちゃくちゃハードなんだけど、心臓破れるかと思うくらいハードなんだけど、」

女「で、丘のうえに着いて。着いたらぐわーって地面に倒れこんでしまうくらい、ハードなんだけど。でももちろんそこは、倒れる、つつーのはボクサー的にゼッタイNGなんで、膝に手をつけて、フウツ、フウツ、フウツ、って息を調べて。で、一息ついて、よし、とか思つて顔を上げたら、そのとたん、」

男「なんかフラツとして」

女「目の前に違和感があつて」

男「そんなとき、たまたま、町がサアって朝日に染まってくのが、階段のうえから見えたんだけど、そういうのすごい見渡せる場所だったんだけど、それ、すげーキレイだったんだけど、」

女「なんか、その風景の一部がぼやけてて、」

男「最初、あれ、俺泣いてんのかな、とか思つて、それか目に汗入ったのかな、それにしでは染みねえな、痛くねえな、とか思いながら、指で目を拭いたんだけど、涙とかぜんぜん出てなくて、」

女「もちろん汗はびっしょりなんだけど、別に目にも入ってなくて」

男「で、あれ？ おかしいな。つて思つて」

女「そしたら、なんか、なんつーの？ 違和感？ みたいなのに気づいて。なんかいつもと違う、つていう違和感に気づいて、でその違和感、なにか、つていうと」

男「自分の鼻、が、見えてない、つてことに、気づいたんですね」

女「いつも特に気にしたことはないんですけど、そういえば、自分の鼻の先？ 鼻の頭？

って、微妙に視界にいつも入ってるな、って気づいて、」

男「そういえば、その自分の鼻の先？ 鼻の頭？ 今、ぜんぜん視界にないじゃん、って気づいて」

女「それ、違和感の正体だったんですけど。で、目を内側に寄せたり、顔振ったりしてみても、あと、我ながらバカっぽいんだけど、鼻がちゃんと付いてるか触ってみたり、したんだけど、どうも、いつも自分の鼻の先？ いつもは微妙に見えるのに、今は見えなくて、」

男「そしたら、そのときなんだけど、」

女「そう。そのときなんだけど、」

男「なんかヘンなものが見え始めて。そこで、初めてはっきり『あ、俺、眼やばいかも』って気づいたんだけど」

女「そう。そこで初めて、それが見え始めて」

男「何が見え始めたかというと、なんて言うか——黒い、霧？ みたいなものなんだけど」

女「霧っていうか、水？ 波？ みたいなものなんだけど」

男「そう、そう」

女「それが、視界の下のほうから、なんかせり上がってきた、っていうか、見え始めて、

突然」

男「あの、例えて言えば、これけっこう的確な例えだと自分で思うんですけど、水中メガネって、あるじゃないですか。で、水中メガネ付けて海とか入ると、泳いでるうちに微妙に水とか入ってきて、足ついて水面から顔上げると、眼の下のほうに水溜まったりするじゃないですか。ちょうどあんな感じで、」

女「そうそう。で、その水が、黒く濁ってる感じなんですわ。濁ってるっていうか、染まってる？ かな？」

男「墨汁、ってほど真っ黒じゃないんですけど、うすく墨を混ぜたみたいな水が、視界の下のほうに揺れてて」

女「ちようどそのとき、階段の上から町を見下ろす、っていう立ち位置にいたんで、なんか、町が黒い海の底に沈んだみたいに見えて。それはちよつと、錯覚としては面白かったんですけど」

男「でも、頭のなかはそれどこじゃなくて。うわ、何これ？ やべえんじゃね、これ？ とか思ってた」

女「眼を押さえて分かったんですけど、その黒い水みたいなのが見えてるの、左目だけで」  
男「こーやって左目押さえて、保護する？ みたいに、家まで歩いて帰って。で、とりあえずシャワー浴びて、鏡のなか見てみたら、なんかさつきみたいな黒い水？ みたいなのは消えてて。消えて、っていうか、薄れてて。左目をのぞきこんでみても、べつに見た目で異常はなさそうだったんだけど」

女「でも、最近そう言えば、なんか視界に黒い点？ みたいなのがよく見えたりとか、それ虫と勘違いしたりとか、っていうのがけっこうあって、それに、そういえばなんかヘンなオレンジ色の光見えたり、っていうのもあったっけ。とか思って。念のため、これ、目医者行つといたほうがいいんじゃないかね？ と思って」

男「それで、タンスの奥からスーツひっぱり出してきて、着替えて」

女「電車に乗って」

男「眼医者に行つたわけです」

男と女、立ち位置を入れ替える。

男、すこし〈キョド〉って、

男「——あの、」

女「……」

男「あのお——」

女「……」

男「どうですかね？」

女「……」

男「いや、別に、オオゴトとは思ってないんですけど、自分でも。なんか最近多いんで、へんな違和感？ っていうか、そういうのが。んで、一応診てもらったほうが？ 安心？ とかその程度なんですけど。——どうですかね？」

女「……」

男「いや、別にもう、今は、その黒い水？ みたいなもぶつちやけないんで。錯覚？ とかそういう類のものじゃないか、とは思ってますけど。——どうですかね？」

女「……それさあ、いつから？」

男「え？」

女「その、黒い水みたいなの。見えたのって」  
男「ああ。今朝、です。えーと。朝、6時？ すぎ、とか」  
女「あそう。早起きなんだ。それで？ 今は？」  
男「あ、いや、もうないっす」  
女「黒い点みたいなの？」  
男「はあ？」  
女「君言ったよね、さつき。黒い点みたいなのが気になりだしたのは、いつ？」  
男「あ、っと、一週間？ くらい前、すかね？」  
女「もっと前だねえ。実際は」  
男「は？」  
女「君ね。網膜、破れてるよ」  
男「はあッ？」  
女「右目にあるねえ、裂孔。3ヶ所。いや4、だな」  
男「右つすか？」  
女「左目のほうがひどいけどねえ。剥がれかけてるねえ、もう」  
男「え、マジっすか。え、それって、大丈夫なんすか？」  
女「大丈夫」  
男「あ、マジで」  
女「じゃないよねえ、ふつうに考えて。網膜、剥がれてるんだもの」  
男「え？ え？」  
女「やばいね、どうも。ボロボロだもの」  
男「え、それ、手術とかできるんですか？」  
女「できないよ」  
男「え？」  
女「できないよ。ここでは。設備とかないからねえ。もっと大きいところ行かなきゃ。どこ  
がいい？」  
男「え、どこ？」  
女「紹介状。書くからさ。どこにする？」

男「え、どこ？」

女「病院」

男「ああ。あ、えっと、じゃあ大学病院で」

女「大学病院ね。はい、はい、——（と、紹介状を書く）」

男「——って感じで、いや、実際にはこんな感じではなかったんだけど、一応もつとちやんと検査とか病状説明とかもしつかりあったし、眼医者もここまでエキセントリックな人ではなかったんで、なんていうか、もつとふつうに、まっとうな対応してもらったんだけど。で、診察の最後に、こんなふうに言われて、」

女「すぐのほうがいいよ」

男「は？」

女「病院。行くんらさあ、早いほうがいいよ。このまま、この足で行ったほうがいいよ。」

時間、経てば経つほど、悪化するよ。怖いよ」

男「つていうようなことを、もうちよつとふつうの眼医者つぽい言葉で言われて、『分かりました、じゃ、これからすぐ大学病院行きます』つつって」

男と女、立ち位置を入れ替わる、ふりをして、また元の位置へ。

男「分かりました、じゃ、これからすぐ大学病院行きます」

女「——って、アオタくん、一応お医者さんにはそう言ったんですけど。で、それは、そう言ったそのときには、ほんとにそのつもりだったんですけど。病院出るじゃないですか。駅に向かって歩いていくじゃないですか。駅前に着くと、そこちよつとした広場ってというのがあって、噴水とかあって、その向こうにちよつとした広さの公園があって、そこにベンチが並んで、で、アオタくん、なんとなくそのまま電車に乗るのが嫌だったんで、嫌っていうか、なんか気だるかった、みたいな感じがあって、ちよつと鬱入ってる、みたいなのがあって、ベンチに座ったんですね。そしたらそこ、公園の敷地内なんだけど、ちよつと大通りに面したところにあるベンチで、なので、ベンチに座って俯いてたら、視界の端に、いろんな人間の靴とか脚が、ひっきりなしに行き交うわけです。それ、平日だったんですけど、それでもけっこう大きな駅だったんで、それなりに人とか多くて、交通量多くて。それがなんか、最初はチカチカして眼が疲れる感じがあったんだけど、だんだん、そのチカチカに眼が慣れてくると、そ

の行き交う脚とか靴とかが、なんか、街っていうひとつの生物の、脈拍？ みたいに感じてきて。それからしばらくすると、今度は大勢のひとがこういう大規模なマスメームに興じてる、みたいにも思えてきて。なんか器用にお互いにお互いにお互いに行き交っていくんで、脚の群れが、なんかそれ、誰かがそういうシミュレーション実験をやってる、社会実験とか言って、みたいにも思えてきて。そしたら、ふっと、『あ、そっか』とか思ってた。『あ、こいつら、ふつうに何てことなく歩いてるみたいに装ってるけど、もしこいつら全員、眼が見えなかったら、もつとドカドカぶつかったりして、ぜったいこんなふうに行き交ったりできないんだな』っていうのを思って、そしたら、なんか、その目の前で行き交う脚の群れが、すごい奇跡みたいに思えて、なんか、じわ、とかいって目の前が滲んできて、『うわ、俺泣いてんのかよ』とかとっさに思って、あわてて眼をこすってみたんだけど、でも眼とかぜんぜん濡れてなくて、それ、涙じやなくて、網膜っていうか、眼がもう壊れかけつつあるせいだったんだけど、それから眼の下のほうから、またあの黒い水がじわじわとかいって現れて、その水位がどんどん高くなっていった——」

男と女、今度こそ、立ち位置を入れ替わる。

男「それからのアオタクんの行動なんですけど、電車を2本乗り継いで、大病院に行つて、受付の看護師さん？ 医療事務さん？ に、前の目医者でもらった紹介状渡して、そしたら待合室でしばらく——しばらくっていうか、けっこう、2時間とか3時間とか平気で待たされて、こっち紹介状もらってきてなのに、なんだこれ、とか思ってた。でやっと診察室に通されたら、またなんか最初から診察やり直し、みたいな、検査もまた一通りやり直し、みたいな、感じに、なったか、ならなかったか、どっちだ、って聞かれれば、結果として、ならなかったんですけど、——っていうのが、アオタクん、さつき駅前のベンチとか座ったじゃないですか。で、人の脚が行き交うの見て、すげー奇跡だ、って思って、なんか涙こみ上げてきた、とか思ったら、それは違った、とかあったじゃないですか。で、その流れで——流れで、っていうのもおかしいかもしれないけど、やっぱそれって、すごいストレスではあるんで、今の状況が。精神的

に、アオタクん的に、なんていうか、異常事態っていうか、アイデンティティクライシス、みたいなことじゃないですか、この場合べつにアイデンティティは関係ないですけど。クライシス、っていうか、ふつうに日本語で危機って言えよ、って話なんですけど、とにかくなんかそういう感じなんで、体が、それに反応して、とかだと思っ  
んですけど、なんか、あの年に2回くらいくる性欲魔人が急に襲ってきて、あ、この性欲魔人っていうのは、アオタクんが自分で心のなかで思ってる、年2回くらい襲われる異常性欲の呼び名っていうか、通称なんですけど、ちょっとすげーバカっぽいんですけど、性欲魔人とか。でもこれ、どっちにしろ最初から人に言うつもりないことなんで、アオタクんの心の中では、バカっぽいとかあんまり関係なく、なんとなくそういうワードがしっくりいったんで、アオタクん的に、だから心のなかでそういうふうに呼んでるんですけど。その性欲魔人がなんか急に襲ってきて、じつは今年、もう1回目の性欲魔人はアオタクんのもとに訪れ済みで、それ、アオタクんがイワイさんをナンパしてラブホ連れ込んだっていう、あのことなんですけど、それが今年の初めごろの1回目で、だから、『うわ2回目来た』とか思ってる、『マジか、このタイミングで来るかね?』とか思ってる、でも来てしまったら、それもうアオタクんにはコントロールできない性欲なんで、性欲魔人なんで、っていうかアオタクん自身が性欲魔人になっちゃうんで、どうしたかという、もうどうしようもないんで、その足ですぐにイワイさんのアパートに行っただんですけど」

女「ピンポンピンポンピンポンツとかいって、え、何? みたいなすごい勢いで、彼、ウチに来たんですね。それまでも何回か彼、ウチには来たことあったんですけど、そのときはわりと紳士的っていうか、そのときまでに、彼が根が気が小さいっていうのを、分かってたんで、部屋に上げたりするのも、怖いとかそういうのはなかったんですけど。もちろん彼、私にとってはカレシとかの認識はまったくなくて、飽くまでラ  
イフレスの一人で、救済の対象であって、でもいかんせん最初がラブホとかだったんで、ずるずる、そういう関係を引きずってはいたんですけど。それで、こういうのはちょっとよろしくないな、って、思ってたところは正直あって、だから彼とはちょっと距離を置こうかな、また別の見つけようかな、とか思ってたところに、彼がピンポンピンポンピンポンツとかいって、すごい勢いで来て、『え、何?』とか思ってる、正直すごい怖くて、ってくらいの勢いがあった。ちょうどそのとき、私、バイトの給与振込みの日だったんで、昼すぎから銀行行こうとか思ってる、ちょうど玄関に出ようとし



てたところで、急にピンポンピンポンツとかいって来たんで、思わず固まっちゃったんですね。そして次、ドンドンドントとかいって、ドア叩きだして、『なにこれ、本格的に怖いんですけど』とか思ってたたら、彼の声が出て、なんか言ってたんですけど、私に聞こえたのは、『頼む助けて——』みたいな声が、聞こえて、それ聞いて、なんか私、脳の奥の？ 胸の奥の？ スイッチみたいなのがフツて入ったの、自分でも分かって、そしたら急に怖くなくなって、『さあ、仕事よ』みたいな感じ？ 気がぴんと張りつめる感じ？ 『さあ、この世での私の使命をまっとするか』みたいな感じがスムーズに湧いてきて。それで、ドアの鍵を開けたんです」

アパートの玄関の錠が外され、ドアが開かれる音。

外に吹き荒れる、強い風の音がする。

溶暗。

溶明。

まぶしい光、女がひとり、舞台中央に立っている。

風の音はまだ続いている。

女「あの、ここでちょっとだけ、突然ではありませんが、眼、についての話をします。現在、地球上には、明確に把握されているだけでも、約100万種以上の動物が生息しているそうです。そしてそのうちの、95%以上の動物種に、なんらかの形で、眼、がそなわっているそうです。眼、というのはつまり、世界に満ちている光を感知して、視覚を、つまり、今まさに目の前に見えつつあるこの世界を、知覚する器官のことです。この眼という機構が誕生したのは、約5億4300万年前、カンブリア紀の初期だと言われています。地球の誕生が46億年ほど前ですので、約5億4300万年前というのは、比較的、最近のことです」

照明、ごくごくゆっくりと、溶暗して行く。

女「5億4300万年前。カンブリア紀。当然ですけど、それ以前の動物たちは、眼、をもってはいませんでした。海底火山の熱いスーブのなかで、地球最初の生命が誕生したのが、およそ35億年ほど前だと言われていますので、それからすると、じつに30億年ちかく、我々生物は、眼や視覚なしでやってきたわけです。その永い永い間、我々は世界を見ることを知りませんでした。我々にとって、触れるものが世界のすべてであり、触覚こそが世界と関係する唯一の手段でした。というより、触れるという行為自体が、世界そのものだったのです。触れたものを食べ、触れたものに食べられ、触れたものとのみ結ばれる世界。しかし、いつからか、その触覚の精度が進化していくにつれ、生物たちはある奇妙な感触を覚えはじめました。その感触とは、具体的には、ごくかすかな波動の感覚です。生物たちは、この世界には、微弱だけでも常に触覚を刺激する、妙な波動があることを知ったのです。その波動は、世界の至るところに満ちていました。生物たちの触覚の一部は、その波動を受容するのに特化する形で、進化していきました。そうして生まれたのが、現在では眼点と呼ばれるものの原型、つまり光感受性のある斑点でした。そう、生物たちが妙な波動として感じていたものこそ、太陽から無限にふりそそぐ、光だったのです」

「このころまでに、舞台は闇に包まれる。」

女の声「我々は光という存在を知りました。そして我々が明るさを知ったその代償として、世界は闇に包まれることにもなったのです。現在の我々の光を感じとる能力からすれば、当時の生物たちの光にたいする感受性は、ごくごく微弱なものだったでしょう。その意味で、世界は暗がり——暗闇のうちに沈んでいました。しかし幸いなことに、その暗黒の時代は、永くは続きませんでした。生物たちの世代交代が積み重なっていくうち、やがて光を感受する斑点が、おそるべき変化を見せはじめたのです。徐々に光にたいする感度を増し、それに加えて、単なる斑点の集まりだったものが、進化の波に揺られ、それぞれ別個の機能を担ったユニットに分化していきました。それに伴って、神経の数が増し、さらにその神経と結ばれた脳細胞の数が増し、ユニットを覆っていた膜が膨らむことでより集光力が増して——ついに、ある日、地球最初の眼が誕生したのです」

舞台がまぶしい光に包まれる。

男と女が並んで立っている。

女「眼は、これまでのようにただ光の明暗を感じるだけではなく、その光が眼に届くまでに、どのような物体に当たって屈折偏光されたのか、その情報までも知覚できるようになりました。その結果、30億年の闇がひらき、世界が我々生物のまえに姿を現したのです。地球最初の眼をもったその生物は、彼を捕食しようとする生物がじぶんに触れるよりもはるか以前に、眼に届く光の情報を『見る』ことによって、その到来を察知することが可能になりました。また、自分のエサとなるべき生物たちが今どこにいるのか、彼はじつさいにそれらに触れるよりもはるか以前に、『見る』という行為によって、彼らの情報をキャッチすることができるようになりました。これまで、触れるか触れないか、でしか語れなかった世界が、眼の誕生によって一変したのです。我々生物は、直接触れることなしに世界と関係を結ぶことが可能になったのです。光が眼と網膜とを通じて、脳のなかに像を描くことで、初めて、世界は我々の前に立ち現れました。半ば我々と触れ合い、半ば我々とは断絶した世界として。たった一对の眼の誕生が、そのような世界を生み落としたのです」

風の音がフェードアウトしていく。

男「俺たちが、今、何をしているのかというと、これは言うまでもないことかもしれませんが、彼女の部屋で、セックスをしています。また、これも言うまでもないことかもしれませんが、俺たちが今しているのは、子どもを作るため、種を保存するため、生物学的セックスでは、ありません。年2回くらい俺のもとを訪れる、性欲魔人を、チン魂化するためのセックスです。チン魂セックスです。彼女は、驚くほどすんなり、俺を受け容れてくれました。最初にナンパしてラブホに連れ込んだときもそうだったんですけど、この女、けっこう俺的に、『ヤバイ』です。もちろんこの『ヤバイ』は悪いほうの『ヤバイ』じゃなくて、良いほう、良いほうっていうか、男子的に良いほうの『ヤバイ』です」

女「玄関のドアを開けると、彼、ほんとに獣みたいな勢いで、私をレイプし始めました。でも私、その彼の暴力のなかで、なんか、これこそ真の救済なのかな、みたいな充実

感を感じたのも事実なんです。形は違うけれど、イエス・キリストもゴルゴダの丘で磔にされて、槍で身体を貫かれたじゃないですか。そういう意味では、真の救済——というか、真の救済にまつわる充足感、達成感のためには、苦痛、というフィルターが必要なかもしれない、とか思いながら、私は、彼の暴力に身を貫かれていたのです」

男「玄関でひと通り盛り上がって、それからお互い絡み合いながら、這いずるみたいにしてベッドまで移動して、そこでまた盛り上がって。ぶつつづけで、十回とか、十五回とか、数とか分かんないですけど、もうヒリヒリしてくるくらい、ぶつつづけでやって、体力が切れるまで。で、体力が切れたらいつのまにか寝てて、でハッて起きたら、彼女まだ隣りとかで寝てるんですけど、なんか寝る前にやりまくったまま寝てるから、すごい匂いとかして、それでまた性欲魔人復活してきて、またやりまくって。で、なんかよく分かんないけど、やりまくりながら、なんか鼻の奥がツンとする、みたいな衝動が、時々襲ってくるっていう体験をして、なんかこみ上げてくる、みたいな感じが、衝動があつて、『うわ何だこれ』とか思ったんだけど、彼女見たら、彼女の顔、なんか知らないけど、もう涙とか鼻水とかでぐちゃぐちゃで、それ見たら今度、なんかすごい吹き出しそうになって、笑いの発作みたいのが襲ってきて、でもやりながら爆笑とかつて、さすがに彼女も引くよな、とか思つて、必死で堪えて。笑い必死で堪えながら、やりまくって、そしたら、その堪える、みたいのがマズかったみたいで、力む、みたいのがマズかったみたいで、なんかあの黒いヤツがまたせり上がりだして、やりはじめたころは、視界の下4分の1くらいだったのが、なんか半分くらいまでせり上がりはじめて、」

女「なんか、ギャツとか叫び声が急に聞こえたんですね。で、びっくりして見たら、突然彼にドンッて蹴られて、ベッドからすべり落ちて。最初、何が起きたか分からなくて、で、立ち上がって見たら、ベッドの上で、彼が、真っ裸でひざを抱えるみたいにしてうずくまって、左目を押さえて、ぶるぶる、ぶるぶるっていうか、ガタガタ？ 見た目に分かるくらい、震えてるんですね。なんか、彼に玄関でレイプされてたときは、私、自分をキリストと重ね合わせて充足感、みたいなのがあったんですけど、ベッドとかに移動してきてからは、なんかそういう感覚薄れていっちゃって、単にいいようにレイプされてる従属感、みたいな感じになって、——でも、ガタガタ震えてる彼を見たら、なんかまた充足感、のほうが復活してきて、あ、この感じ、もうちよつとじ

ぶんのなかで盛り上がれば、意外といいかも、って思っ、彼に近づいていって、彼を包み込む、みたいな感じで優しく包んであげて」

男「そしたら、この女、俺、目が今大変なことになってんのに、バカみたいに抱きついてきて。そんなにやりたいのかよ、って思っ。腹立っ。でも、そんなとき、ちょうど角度的に、彼女の乳が、俺の目の前にあっ。で、なんか俺の目の前でふるふる、とかいって揺れてるわけですよ、乳が。彼女、けっこう大きいほうだったんで。そのふるふる、みたいな見てたら、なんかもう眼とかどうでもいいよ、みたいに思っ。そのふるふる、なんかヤケになってきて、ムラムラしてきて、——っという、俺、ただけモノなんだよ、って感じなんですけど、でもそうで、彼女押し倒して、中にまた入れて、でも、俺、そうやってやりながら思っ。ですけど、やりながら、彼女の乳が揺れてるのを見ながら思っ。ですけど、乳、揺れてるの見て、『うわこの女、乳すげー』とか思っ。たり、裸の肌が汗ばんでるの見て、『うわこの女、ヤラシー』とか思っ。たり、イキ顔が可愛い女と、そうじゃない女っ。いて、そのイキ顔が可愛いほうの女に当たると、すげーラッキー！ とか思っ。うな、とか、いろいろあるんですけど、そういうの、って、ぜんぶ、俺はこれまで、俺の外側？ にあるものなんだと、ふつうに思っ。思っ。たんですけど、俺の外側に世界っ。いうのがあっ。て、っ。いうふう、ふつうに思っ。思っ。たんですけど、でもそれ、どうも違っ。うくて、たとえばこのまま俺、網膜とか剥がれたら、ペろんとかいっ。て剥がれたら、そういうのぜんぶなくなるんだな、っ。思っ。て、そう考えたら、世界っ。て、たっ。たふたつの、直径2センチとか3センチとかの、薄っ。ぺらい膜でできてたんだな、っ。思っ。て、したら何かそれすげー怖っ。なっ。て、だっ。って、たっ。たふたつのその膜剥がれたら、ペろんとかいっ。て剥がれたら、それだけこの世界もう終わりじゃん、っ。思っ。て。それすげー怖っ。くて」

男と女、一切の動きを止める。

溶暗。

闇の中。

男の声「——それから、アオタクくんがどうしたかと言うと、大学病院に、結局まだ、いまだに行ってなくて、」

女の声「イワイさんは、あのあと、ちよつと思うところがあつて、アパートの部屋の冷蔵庫とかに残つてた食品とかをぜんぶ処分したんですね。処分して、田舎、島根なんですけど、そっちの実家のほうに一旦帰つて、アパートの契約とかは、まだそのままなんですけど、ブレーカーとかは落として、しばらく島根のほうに帰ることにしたいんで、田舎に帰つて、それでこっちの知り合いの番号はぜんぶ着拒とかしてしまつたんで、もう連絡とか、取れないんですけど」

男の声「それから、アオタクくん、ふらつと、ジムに行つたんですね。イワイさんとセックスマイムした後。そしたら、ちょうどそのタイミングで、『ああ、お前試合決まつてるぞ』とか言われて。『2カ月後に試合組んだから』とか言われて」

女の声「それで相手が、世界チャンピオンとか、せめて日本チャンピオンとかだったら、ドラマとして盛り上がりたりするところなんですけど、そうじゃなくて」

男の声「ぶつちやけ、相手、ノーランカーで。なんか、裏の事情的には、その相手の選手つていうのが、これから売り出しの若い選手で、経験値上げるために2カ年計画とかいって、試合日程組んでただけど、本来試合組んでた選手にドタキャンとかされて、でもその時期にどうしても1試合こなしときたくて、でも代わりの選手つていうのがなかなか見つからなくて、つていうなかで、お鉢が回ってきた試合だったんですけど」

女の声「当然、アオタクくん的には、試合なんかできる状態じゃなかったんですけど。もう

網膜剥がれかけなんです」

男の声「でもアオタクくん、そのタイミングの良さ、つていうのを、考えちゃつて」

女の声「あの目の端にオレンジ色の光を見たとき、これは神の啓示だとか言われたけど、啓示つていうなら、このタイミングでこの試合。これこそ啓示なんじゃないか、つて」

男の声「そういう思考回路に捕まっちゃつて」

女の声「それで、アオタクくん、その試合をじぶんの引退試合と位置づけて、勝手に」

男の声「アオタクくん、そういう自己中なところあるんで」

闇。

強烈な光。

舞台中央に立つ男に、強いスポットライトが当たる。

男、肩を中心に身体をほぐし始める。

試合前の控え室。極度の緊張を抜くため、フウツ、フウツと何度か強く息を吐く。

せわしなく体を動かし、これまでの練習を反芻し、集中力を高める。

その脇の闇のなかに、ぼんやり女の姿も見える。

女「よく、何の得にもならないのに、みたいな言い方、するじゃないですか。特にスポーツ選手とか——たとえば野球選手とかで、もっと有利な条件で移籍とかできるのに、義理立てして元のチームに残り続けるみたいな選手がいます、『彼のキャリアにとっては何の得にもならないのに』みたいに言うじゃないですか。『それでも、彼は、このチームに残ることを選んだのだ』みたいな。今のアオタクんの状況も、まあ、そういうふうに捉えようと思えば、できるわけですよ。もう30を過ぎて、これから世界を狙えるわけでもなくて、それでも眼の状態を隠してまで、そういう危険を冒してまで、ノーランカーの相手と試合をする。アオタクんにとっては、何の得にもならないのに」

男、キツと顔を上げ、ファイティングポーズをとる。

カアン、とゴングが鳴る。

男、前に出て対戦相手と拳を合わせ、軽やかにフットワークを開始する。

女「でも、アオタクんの場合、そういう方って、どうなんだろう、つていうのがあって。どういうことかというのと、つまり、言葉は悪いけど、結局アオタクんにとって、ボクシングって、自慰行為と同じなんじゃないかって。そういう説があつて。つまり、これは彼にとつてのオナニーであり——いやでもそれは、そんなこと言ったら、自己表現と呼ばれるものは、すべてそうなのかもしれないけど——でもこれはつまり、アオタクんの、ボクシングという形に擬態した、マスターベーションなんじゃないか、つて。そういう説があつて。それって、けっこう的を得てるような気がするんですよ。

分かんないですけど」

男、ジャブを主体に慎重に試合を組み立てていく。

女「どうなのかなあ、実際のところ」

男「オナニーじゃないかって、いうのは、まあそうかもしれないけど。でもその何が悪い、つつーのが、俺のほうの言い分としてはあって。俺、いい加減な人間かもしれないけど、ボクシングに対しては、けっこう真剣に打ち込んできた、っていうか、真面目に、真面目にっていうか、ちゃんとボクシングを愛して、愛してっていうか、——ボクシングって、すげーじゃん。マジで。そういう自負があつて。でも、考えたら、ボクシングって、ただ人殴るだけじゃん、っていうのがあつて。そういうふうにするヤツ、実際にいるし。人殴るのがそんなに面白いですか、つつて。面白くなきゃしないじゃん。面白くなきゃ、観にこないじゃん、誰も。人殴るって、面白いし、殴るの観るのって、面白いて、それ、けっこう当たり前じゃん。っていうのがあつて、でも、俺は、ボクシングって、けっこう、それ以上のものだっていうふうに、考えて。考えて、っていうか、感じて。ボクシングって、オナニーって、オナニーならオナニーで、別にいいけど、でも、ボクシングって、人殴って面白くて、殴るの観て面白くて、ってだけのものじゃ、ぜったいじゃないじゃん、っていうのが、絶対的価値観として、俺のなかにはあつて」

カァン、とゴングが鳴る。

1ラウンドが終わり、男、スポットライトから外れて、闇のなかにある椅子に座る。マウスピースを外し、水で口を濯ぐ様子が、暗闇にぼんやり見える。

女「……でも冷静に考えて、ボクシングって、人殴るの観て楽しむって、それが本質だと思うんですね。そうじゃないですか。だからわざわざお金払って試合を見にくるわけだし、だからプロスポーツとして興行が成り立つわけだし。逆に、『いや、ボクシングってというのは、そういう野蛮な娯楽っていうだけじゃない、それ以上のものなんだ』っていう考え方って、どっちかっていうと、価値観の水増し、っていうか、概念の粉飾、っていうか。明らかにそれは錯覚で、しかもそういう錯覚が、積もり積もって、



人類を戦争とかに向かわせてきたんじゃないか、っていうのも思うんです。私的には」

男、椅子から立ち上がり、ふたたび光のなかへ。

カアン、とゴングが鳴る。

男「難しいことは、分かんないけど、俺にとって、ボクシングは何か、って、じゃあ聞かされたとして、俺がそれに答えなきゃいけないとして、何て答えるか、って言ったたら、たぶん、『俺のすべて』とか、『人生そのもの』とか、まあそういう答えしか、言えないと思うんだけど、『じゃああなたの人生、負け犬ですね』って、言われるかもしれないけど、別に俺、世界チャンプになったわけでもないし、日本チャンプになったわけでもないし、でも、それでも十年以上続けてきて、そうすると、じゃあ、俺の人生って何？ ってことになるのかもしれないけど、それって、つきつめていけば」

男、スリップ気味にダウンする。しかしすぐに立ち上がる。

レフェリーから何か言われるが、首を振って否定する。すぐにファイティングポーズをとる。

女「ファイッ！」

男、またフットワークを始める。

男「そう言えば、さっき、さっきっていうか、かなり前だけど、ちよっとだけ夢の話をして、そのとき言い忘れてたことがあって、——って、これからする話は、『俺にとってのボクシング』っていう話とは、もしかして関係ないかもしれないけど、でもふっと思い浮かんだんで、話すけど、ふっと、こういうときに思い浮かぶって、それ、けっこう本能的に関係あったりする、っていうのを、俺経験的に知ってるんで、それで話すんですけど、黒い津波がきて、それに襲われる夢を、よく見るって、言ったじゃないですか。そういうとき、津波に吞まれても、吞まれる前と何にも変わらないって、言ったじゃないですか。でも、一回だけ、そうじゃなかったときがあった」

女「時期的に言うと、その夢を見たのって、いまは女教師をやってる前カノと付き合っ

た時期で、しかも、なんかおなじ時間がある程度ふたりで過ごしていくと、お互いの価値観の違いとかが、ちよつとした話のなかとかでも明るみに出てきて、それは仕方ないことなんだけど、でもそれがきっかけで何回も喧嘩になったりとかもして、そのうちに、そういう溝って、どうやら埋まらないぞ、って、ああこいつとは、どうも根本的なところで話が噛み合わないぞ、って、お互いに気づき始めた、っていう、そういう時期に見た夢なんですけど、」

男「あと、それから、その夢を見た直前に、映画の、『ディアフタートゥモロー』っていうの、地球に氷河期が来る、っていう映画なんですけど、そのDVD借りて見てた、その直後の夢、っていうのもあって。その影響、かなりあったと思うんですけど。俺、なんか東京タワーの、展望台みたいなところにいる。外の街、見てるんですけど、そしてら、ずっと向こうのほうに海が見えてて、その、沖のほうから、いつもの、黒い津波が、ぐわー、とかいって、こっち向かってきて。ビルとか、がんがん倒されながら、水の壁、みたいな津波が来るんですけど。で、周りの人たち、やっぱパニックとかになって。俺、そんなとき、ここ、超高いとこだから大丈夫だろ、とか思ってた、さいしょ余裕で、街が波に吞まれていくところ、見てたんですけど、映画観るみたいに。そしたら、誰かが、ここ、折れるぞ、みたいなことを言い出して。津波に襲われたら、このタワー折れるぞ、って言い出して。周りが超パニックになって、俺も、あ、そっか。って思ってた。なんかそんなとき、頭のなかでイメージとしてあったのは、東京タワーみたいなタワーっていうより、なんだろ、あの遊園地にあるフリーフォールみたいな？ 形的には、ゴルフのティーカップみたいな？ 細長い棒の上に、円盤型の展望所が突き刺さってる、みたいなタワーで、たしかに俺が今いるの、そういうタワーじゃん、とか思ってた、逃げなきゃ、と思ってエレベーターに行くんだけど、当然、そこすごい人だからで、ドアに近づくんこともできなくて、そしたら『こっちから出れるぞー』っていう声が聞こえて、そっち行ったら、ガラスの自動ドアみたいなのがあって。うわラッキーとか思ってたそっち走ってって、自動ドアくぐって、外に出たら、すぐ外に出れて。ラッキーとか思ってた。それ、いつのまにか地上1階にいたことになってたんだけど、でも夢の中って、意外とそういうとこOKなんで、そのときもそれで別にOKで、ラッキー外に出れた、とか思ってた、走って皆が逃げてるほうに逃げて、そしてら、走っていく方向にでっかい交差点があって、その交差点の右手から、急に黒い波がぐわーとか襲ってきて、前走ってた人間がそれにうわ、とか思う暇もなく呑みこま

れて、そしたら、その呑みこまれた人間、凍ったみたいに、ピキ、って固まって、でもべつに凍った感じじゃなくて、でもフリーズして動かなくなってる。そしたら次々波に呑まれた人間たちが、呑まれた格好のまま、ピキ、ピキ、とか固まってって、俺、あ、これ時間が凍ってるんだ！　って気づいて、ヤベえ、とか思っただけ、今来た道を引き返して、必死で走ってくんだけど、そしたら目の前からも黒い水がぐおーとかいって迫ってきて、なんか挟み撃ちにされて、あ、やべ、もう終わりだ、とか思っただけ止まって、うわ俺もうここで死ぬじゃん、って思ったら、黒い水のなかに一気に呑まれて、呑まれたとたん、ガキッって体じゅうの骨に衝撃があって、あ、固まった、って思っただけ」

男、一切の動きを止める。

女「ガキッ、ガキッっていう、骨が響く音を、彼、アオタクくんは今、聞いてて、それ、アオタクくんにははつきり何の音なのかって、分かってないんだけど、じつはそれ、骨がガキ、ガキ、と響く音で、でもそれが相手のパンチによって自分の骨が鳴っている音なのか、自分のパンチによって相手の骨が鳴っている音なのか、そこはぜんぜん判別できなくて。とにかくアオタクくん、意識の周辺みたいところで、そのガキッ、ガキッっていう音だけを、漫然と聞いてて、それはたぶん、試合の中盤くらいからなんだけど、そのころにはもう、はつきりした明確な記憶っていうのがアオタクくんにはなくなってる、なんか、一回、汗を踏んでスリッパしただけなのにレフェリーがダウンをとったんで、それを抗議した、みたいな記憶はあるんだけど、それが何ラウンドのことなのか、アオタクくんには分からなくて、ただ、ガキッ、ガキッっていう骨の響く音だけ聞いてて、」

男、両手をだらりと下げる。

男「そう。はつきり記憶があるのは、シャワーを浴びてることで、それは、もう試合が終わったあと、控え室の奥のシャワー室で、熱いシャワーを浴びてる時なんだけど、なんか試合の途中からそこまでの記憶となくなってる、あれ？　って最初思っただけ、でもシャワーを浴びながら、試合に負けたのだけは、なんとなく分かってる。ああそうか、

俺負けたんだな、って思ってた」

女「これまで十年近く指導してくれた、イワタさん、っていうトレーナーがいるんですけど、」

男「イワさん、俺、どうやって負けたの？」

女「って聞いて、でもイワタさん、それ、答えてくれなくて、」

男「なあ、イワさん。俺、負けたんだろ？」

女「って聞くんだけど、イワさんは、今日はいいいから、なんもかんも忘れてゆっくり休め、とか言ってる、教えてくれなくて、」

男「それからイワさんの車に乗って——いつも試合のあとは、その晩だけイワさんの家に泊まることになって、イワさんちって、イワさんいい歳こいて独身なんで、実家なんだけど、そこ、イワさんの年老いた両親が定食屋をやってる、その二階の昔下宿やってたときの名残りの部屋に泊まるんだけど、イワさんちに着いても、いいから今日は休め、ばっかで、何にも教えてくれなくて、」

女「じゃあいいよ。自分で確かめるから。ビデオ出して」

男「って言ってる。試合は、ジムのスタッフが必ずビデオに——ビデオっていつても、正確には、デジカメなんだけど——に撮ることになってたんで、そのビデオ見ようと思ってる、イワさんに要求したら、イワさん、それも拒否ろうとして、でも俺がしつこく粘って要求したら、黙って、投げるみたいにして、デジカメ渡してきて。俺、二階の部屋に行ってる、ビデオつないで、そこ、もともと下宿をやってたときの名残りか分かんないけど、テレビとか揃ってるんで、そのテレビにつないで、試合見たら、俺、最初のころは、ちゃんと記憶があるから、その記憶をなぞるみたいに見えるんだけど、5ラウンド？ 6ラウンド？ くらいから、なんか記憶が怪しくなってる、あれ、こんなパンチ受けたっけ？ っていうのがいくつもあって、なんかそのへんから、記憶とのリンクが完全に切れて、なんか、よく分かんないけど、今まで見たことない自分が、ビデオのなかにいて、最初それ見たとき、思わず『はあ？』とか声が出たくらいで、なんかまるで他人の試合見てるみたいな感覚で自分の試合見たのって、このときが最初で、最初でとか言ってる、これ、もう俺、最後の試合なんだけど、でもこれ、ホントに俺か？ とか思ってる、思ってたなら、なんか、ぶわ、とかいってなんか泣けてきて、どんどん泣けてきて、マジかよ、とか思ってる、泣けてきて、マジかよこれ、マジかよ俺、俺コレで終わりかよ……って、……」

女「——っという、」

溶暗。

溶明。

女がひとりで舞台に立っている。

女「その夜、アオタクンが見た夢の話を、これからちよっただけして終わりにしようと思  
うんですけど、その夜、っというか、つまりアオタクンにとって、たぶん人生最後  
なる試合が終わった、その夜に見た夢の話なんですけど、ただいつも、試合が終わっ  
た日の夜って、気が高ぶって朝まで眠ることができなくて、布団とか入っても、ぜ  
んぜん眼が冴えてて眠れなくて、いろいろ試合のこととか考えて、悶々としてくるん  
で、結局、何回もエンドレスで試合のビデオ観たりすることになる、っというのがい  
つものパターンで。で、この夜も、やっぱりアオタクン、ぜんぜん、眠れなくて、ず  
っと起きてたんですけど、でも朝が来るころに、ちよっただけ、うとうとして、その  
まま意識が吸いこまれるみたいに、暗闇に落ちていくみたいに、眠りに落ちて、そう  
いうふうにして、アオタクン、眠ったんだけど、でもそれから次に彼が眼を覚ますま  
で、彼は一切、何の夢も見ませんでした。だから、私の話も、これで終わります」

女、一礼。

溶暗。

闇。

スポットライトのなかに、女の姿が浮かぶ。

女「えーと、それじゃこれがほんとの最後になるんですが、最後に、眼、についての話を

します。これは、アオタくんが網膜剥離を本格的に発症する前の話なんですが、彼が網膜剥離の前兆の、飛蚊症を——つまり、目の前を黒い点が飛んでいく、っていう症状を、彼が初めて明確に自覚した、っていう、そのときの話とこの話をやっつて、ほんとの最後にしたいと思います」

女のすぐ脇に、もうひとつスポットライトが照らされる。

そのなかに、男の姿が浮かぶ。

男、退屈そうに携帯電話をいじっている。

しばらくいじっている。

それから、ふと顔を上げ、

男「あ、蚊だ」

女、右手を上げ、宙を飛ぶ蚊を握りつぶす。  
と同時に暗転。

(了)